
仮面ライダー始めてみました。

ゆうたんぺ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー始めてみました。

【Nコード】

N1919P

【作者名】

ゆったんぺ

【あらすじ】

無限に広がる大宇宙。その中で大きな戦いが始まろうといていた。この作品は、『バカとstrickersと不要者とグレン団と・・・多すぎる(汗)』の続編です。初めて見る方は、先に前作を見る事をお薦めします。(皆さんのおかげで総合PV1万突破しました！)

プロローグ（前書き）

初めてこの作品を見る方：この作品は、『バカとstrikers
と不要者とグレン団と・・・多すぎる（汗）』の続編です。先に前
作を見る事をお薦めします。

プロローグ

無限に広がる大宇宙。

そして、極めて近く果てしなく遠い世界で……

[illegible]

┐	?
•	?
•	?
•	
└	

???

「・・・」

睨み合う二人。一人は仮面ライダー『ディケイド』。もう一人は、半透明の人間。

ファイナルアタックライド！ディ・ディ・ディ・ディケイド！

ディケイド

「はあ！！」

ディケイドが、黄色いカードをベルトに入れると、高く跳びあがる。すると、ディケイドと半透明の人間の間から、大きなカードが10枚現れる。

ディケイド

「でやああああ！！！！」

そしてディケイドは、必殺技『ディメンションキック』を、半透明の人間に目掛けてキックする。

???

「・・・・・・（にやり）」

その途中、半透明の人間が笑ったが、

ドゴオオオオオオン！！！！

デイケイドはそれに気づかず、キックは相手に直撃した。

プロローグ（後書き）

こんにちは、ゆうたんぺと申します。

仮面ライダーモノを書くのは初めてですが、読者の皆さんが、『面白い』と思うように頑張って書きますので、応援よろしくお願いします。

それでは、次回をお楽しみに！！

第1話「誕生！剣を使いし仮面ライダー！でもブレイドじゃないよ。」前編

<トウガ視点>

変わったUSBメモリを拾った日から、二日後の登校日の朝。そのメモリを持ちながら、自分は通学路を歩いていた。

「何なんだろう、これ？」

メモリを眺めながらそう呟く自分。

7

???

「トウガー。」

すると後ろから、誰かが声を掛けられる。後ろを向くと、そこにいたのは・・・

あさひ

「おはよう。」

キャロ・クルス

「トウガさん、おはようございます。」

シモン

「おはよう、トウガ。」

自分の級友、あさひ・キャロ・クルス・シモンだった。

トウガ

「おう、皆おはよう。」

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

校舎の中の廊下を歩いている間、

シモン

「ん？トウガ、それ何？」

シモンが自分が持つてるメモリに気がつく。

トウガ

「これか？二日前の帰りの時、自分の頭に当たって拾った。」

そう言いながら、自分が持つてるメモリを皆に見せる。

あさひ

「USBメモリ？にしては大きいような・・・」

キヤロ

「それに、白色は見かけますが、藍色のメモリなんて見た事ありません。」

クルス

「この『S』って何なんでしょうか？」

シモン

「しかもよく見ると、スイッチがある。」

皆がそれぞれ、メモリの意見や疑問を述べていく。

トウガ

「自分もこれは一体何だろうと思って、パソコンで調べても分からずで、USBメモリだからパソコンに差し込もうとしても、この大きさだから入らない。そして最後にスイッチを押してみたけど・・・」

そう言って自分はメモリのスイッチを押すと、

セイバー！

トウガ

「この音声しか出てこない。」

シモン

「ホントにこれ何なんだろう・・・」

皆で色々と考えたりしたが、結局メモリの正体は分からずじまいで

終わり、皆教室へ向かった。

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

そしていつも通り自分は、授業の間から昼休みまで昼寝する。メモ
リを拾う前までは、本当は昨日から今日の朝までぐっすり寝るつも
りだった。だが拾ったメモリが気になり調べていた。

トウガ

「(うゝん、メモリは後で機械に詳しいリーロン先生に調べてみる
か。)」

睡魔が襲ってくる中、自分がそう思いながら眠りの世界へロゲイン
し始めた。・・・その時、

ドゴオオオオオオン！！

突然の爆発音により、自分の眠気がシャットダウンされた（泣）。
というか何事？

Dクラス生徒

「おい！あれ誰だ！？」

生徒の一人が、窓からグラウンドにいる一人の男を指差しながら叫ぶ。

???

「・・・・・・」

その男は、無言で何かを取り出す。って、あれって自分の持つて

メモリと同じ物？ちよつと形は違うが。

フレイム！

男の持つてるメモリから、そんな音声が聞こえると、男はそのメモリのコネクタを首に付ける。すると男は、炎のかたまりのような怪物になった。って、ええっ！？何これ！？何これ！？

???

「ふん！！」(ドカン！ドカン！)

すると怪物は、炎を纏った拳で校舎を殴り壊し始めた。

Dクラス生徒A

「うわああああ！！」

Dクラス生徒B

「何なんだあいつ！？」

Dクラス生徒C

「分からねえよ！ていうか俺達逃げた方が良くないか！？」

Dクラス生徒A

「賛成！！さっさとココからオサラバする！！」

生徒Aがそう言って教室から出って行った。その後からは全員が逃げ出した。

クルス

「えっと……トウガさん。」

トウガ

「しかたがない、自分達も逃げよう。」

混乱しているクルス達に、そう言うしかなかった。

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

数分後、自分は一人で校舎の屋上に来ていた。他の人？人ごみという名のなだれによって、皆と離ればなれになってしまった。

トウガ

「まいったな、下が混んでちゃあ出られないなあ。」

下の入り口を眺めながら自分が呟くと、屋上の出入り口のドアから誰かが入って来た。

明久

「あれ？トウガ？」

姫路

「梶原君？」

ライ

「あ、トウガ兄ちゃんじゃん。」

Fクラスの吉井明久、姫路瑞希さん、ライ坊こと雷シユンスケだった。

明久

「どうしてトウガが一人でココに？」

トウガ

「人ごみで皆とはぐれた。」

明久の尋ねにそう答える自分。

明久

「あゝ、僕達と一緒にか。」

トウガ

「え？お前らも？」

明久

「うん。姫路さんとライ君とは何とかはぐれずすんだけど。」

トウガ

「まあ後で探せばいいさ。とにかく今はどうやって下に降りるか」

そう自分の言葉が言い終わる前に、

????

「ゲワアア！！！」

さっきの怪物が下からここまで跳んで、自分達に襲いかかって来た。

明久

「な！？」

ライ

「うわ！！」

姫路

「きゃあああ！！」

驚く全員。声は出してはいないが、自分も驚いている。その瞬間、

???
×2

「「でやああああ!!!!」」

どこからともなく現れた何かが、飛び蹴りで怪物を吹っ飛ばす。その何かは・・・

クウガ

「ハッ!!」

赤い体のクワガタのような仮面ライダー、『クウガ』。

電王

「俺、参上!!」

パツカリ割れた桃のような顔の仮面ライダー、『電王』だった。

第1話「誕生！剣を使いし仮面ライダー！でもブレイドじゃないよ。」前編（後

クウガと電王登場！！中編へ続く。

第1話「誕生！剣を使いし仮面ライダー！でもブレイドじゃないよ。」 中編

<トウガ視点>

一体何が起こってるんでしょうか・・・。

明久

「トウガ・・・」

ライ

「トウガの兄ちゃん・・・」

トウガ

「・・・お前らの言いたい事は分かってる。でも自分も何かなんだか・・・」

クウガ

「ハア!!」(ドゴ!)

電王

「でりゃあ!!」(ガス!)

????

「ガアアア!!」

なんでうちの学校に仮面ライダーが怪物と戦ってんの!?!?何かのドッキリ!?

姫路

「????」

姫路さんはもう、頭の処理が追いつかないのか目が点のまま、ぼけくとしている。

クウガ

「その君達！！ボケっとしてないで早く逃げて！！」

自分達が驚いてる中、クウガから逃げろと忠告される。

トウガ

「皆！！とりあえずこの人の言う通り逃げろ！！」

クウガの忠告で我を取り戻して皆に告げる。

明久

「え！？でも・・・」

トウガ

「何度も言わせるな！自分だって何が何だかさっぱりだ！！だからここはおとなしく逃げるぞ！！」

明久

「え〜と、え〜と・・・」

おろおろし始める明久。あーもう！！

トウガ

「あ！姫路さん、あれは何だ！？」

姫路

「え？あ！ふえ！？何ですか！？」

自分が明後日の方向に指差した所に、姫路さんはパニくりながらもあたりを見回す。よし！

トウガ

「おらあ！！」(ゴキヤ！！)

明久

「&#\$%！！！？」

学園祭で使ったアレをもう一度明久に喰らわせて気絶させる。しばらくは起きないが、今逃げるなら黙らせた方が一番いい。

トウガ

「よし！皆逃げるぞ！！」

姫路

「ふえ！？あ、はい！」

ライ

「相変わらず鬼だね・・・」

ライが何か言ってるがスルー！今は逃げる事が先だ！！

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

明久を抱えながら、皆でさっきまで生徒でいっばいだった玄関へ来たのだが・・・

ライ

「・・・あれ？」

姫路

「どついう事でしょつか・・・」

今は誰もいなかった。

トウガ

「とにかく、外に出よう。」

姫路

「はい。」

ライ

「うん。」

二人が頷き、さっさと外へ出たが・・・

????

「イー！」

????

「イー！」

????

「イー！」

黒タイツの何かが百人くらいうじゃうじゃいた。

トウガ

「逃げ道変更！裏門へ行くぞ！！」

姫路

「は、はいいいい！！」

ライ

「りょーかいいい！！」

あんな数、相手できるか――！！！！

！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

とりあえず、黒い何かから逃げだした自分達は、裏門を目指しグラウンドを走っていた。・・・すると、

（ドカーン！）

クウガ&電王

「うあああああ!!」

クウガと電王が、怪物にやられて屋上から自分達の近くに落ちてきた。すると今度は、

???

「ガアアアア!!」

怪物そのものが下りてきた。

???

「ガアアアア!!」

怪物はそのままクウガ達と自分達に襲いかかって来る。

ライ

「わわわわ、こっちへくるー!!どっつする兄ちゃん!!どっつする兄ちゃん!?!」

トウガ

「ちょ、落ち着け！とりあえず自分を揺さぶるな！吐き気が襲ってきたから！！それに抱えてる明久も落ちちまうから！！」

そんなやりとりしていると、

ポロ、カシャン

ポケットにしまっていたメモリが、ポケットから出てきて地面に落ちた。

クウガ&電王

「！！！！」

その出てきたメモリを見て、クウガと電王が驚く。

電王

「おい、お前！それをどこで！？」

電王が自分に尋ねてきた。

トウガ

「え！？えゝ、一昨日家に帰ってる途中、自分の頭に当たったんで拾った。」

電王

「そうか。・・・おい！クウガ！！」

クウガ

「分かってる。」

電王の合図に、クウガが何かを差し込む赤いベルトを取り出し、自分に渡す。

トウガ

「え？え？何？何？」

クウガ

「説明は後で！そのベルトを着けてメモリを差し込んで！！」

トウガ

「え！？え！？」

クウガ

「早く！！」

？？？

「ガアアアア！！」

段々迫って来る怪物。

え〜と、え〜と………

トウガ

「だーもうー！怪物出てくるわ、そいつが昼寝の邪魔するわ、仮面ライダー出てくるわ、おまけに変なベルト渡してくるわ、今日は厄日かこんちくしょー！ー！ー！ー！！！！（怒）」

ヤケになりながらベルトを着ける。すると頭の中にやり方が入って来た。そして落ちたメモリを拾ってスイッチを押す。

《セイバー！》

トウガ

「変身！！」

メモリからの音声が響いた後にそう言いながら、メモリを赤いスロットに差し込み、右に開くかのように押し倒す。

《セイバー！》

またメモリから音声が響くと、自分は青い光に包まれた。

[illegible]

<ライ視点>

トウガの兄ちゃんが青い光に包まれて、それから3秒ぐらいで収まると、そこに現れたのは・・・

体が青……じゃなくて、紺色、

真っ白で、背中に『S』と書かれたジャケットを羽織って、

僕から見て、左は短い代わりに右が長い角、

そして腰に鞘を付けた『仮面ライダー』が現れて、怪物に指差しながらこう言った。

???

「おい怪物!!!」

???

「?」

???

「覚悟しろ!!今日の自分は機嫌が悪い!!!(怒)」

第1話「誕生！剣を使いし仮面ライダー！でもブレイドじゃないよ。」中編（後

トウガが仮面ライダーに変身！！後編へ続く。

第1話「誕生！剣を使いし仮面ライダー！でもブレイドじゃないよ。」後編

<明久視点>

ん〜、・・・あれ？僕いつのまに寝てたっけ？確か仮面ライダーが現れて、その人達に逃げると言われて・・・あ！その後トウガのアレを食らったんだっけ！？のんきに寝てる場合じゃない、早く起きて逃げた後、トウガにたっぷりとお返ししないと！！

明久

「トウガアアアア！！！」

姫路

「ふわ！？あ、明久君！？」

ライ

「あ、目覚めた。」

勢いよく起き上った自分は、驚いてる姫路さんと、僕のお目覚めに気がついたライ君を無視してトウガを捜す。くそ！どこだ！？

???

「ん？目覚めたか明久。」

僕の後ろからトウガの声が聞こえ、振りかえるとそこには今までい
なかつた謎の仮面ライダーがいた。

トウガ視点

明久

「……君、トウガ？」

今まで寝てた明久がそう尋ねてきた。まあ氣絶してたし知らないか。

トウガ

「そうだけど。」

明久

「死ねええええ！！！」
（怒）

自分が軽く答えたら急に跳びかかって来た。

???

「何だよバカたれ。」（どごっ！！）

明久

「ぐえっ！？」

回し蹴りで明久の横っ腹を蹴り、跳びかかって来た明久を退ける。

???

「全く、怪物を倒した後に次はお前かよ。」

明久

「ぐおおおお・・・え？倒した？」

悶えてた明久に、ボロボロの男を指差す。

明久

「うわ！本当だ！！もしかしてトウガ一人で!?」

????

「おう。お前がまだ寝ているあいだにな。」

|||||数十分前|||||

????

「覚悟しろ！！今日の自分は機嫌が悪い！！！」（怒）」

トウガが怪物に指差しながら言う。

????

「ガアアアアア！！」

一方怪物は、それに構わずトウガに襲いかかってくる。・・・が、

????

「ふんっ!!」(ズドン!!)

トウガが怪物の顔を思い切り蹴る。

????

「グウウウウ!!」

????

「でい!やあ!はあ!」(ドゴ!ドン!ダン!)

トウガの蹴りで鼻に当たり、怪物は鼻をおさえながら悶え、その隙にトウガは追撃で腹を殴りだす。

????

「おりゃあ!!」(ゴスッ!!)

続けて次は、ヒザで相手のアゴを砕く。

????

「グ・・・ググ・・・」

アゴを砕かれたせいか怪物はよろつきはじめ、これを好機と見たトウガは、赤いスロットからメモリを抜き取り、横の黒いスロットに差し込む。

《セイバー！マキシマムドライブ！！》

そんな音声が出てきた後、トウガの右手に光が集まり、大分集まった所でトウガは右手を手刀のように構える。

????

「グウ・・・グアアアア！！！」

よろついていた怪物は、ヤケになってトウガに殴りかかる。・・・が、

スッ・・・

ブンッ！！

ギリギリの所で避けられてしまい、

????

「でやああああ！！！！」(ズドン！！！！)

トウガのカウンター(手刀)をモロに食らってしまった。そして、

ドスッ！！

トウガの手刀から集まっていた光が剣の刀身のようになり、怪物の体とメモリが突き刺さり、

????

「・・・チェックメイトだ。」

????

「グワアアアア！！！」（ドカアアアアン！！！」）

爆散した。

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

明久

「なるほど、それで今にいたると。・・・所で、他の仮面ライダーは？」

????

「ああ、あの二人なら

」

トウガがなにか言いかけた瞬間、

ファアアアアン！！

トウガ達の近くからどこからともなく、白い電車が汽笛を鳴らしてやって来た。

???

「あの電車を持ってきた。」

トウガがそう言うと、白い電車の一両のドアが開く。するとそこからある人が顔を出す。

サクラ

「とう君。」

梶原トウガの姉、梶原サクラだった。

???

「って姉さん！？何でそれに乗ってんの！？」

サクラ

「後で説明しますから皆さん乗って下さい。」

とりあえず、サクラの命令で乗車するトウガ達。その間、明久がトウガに言う。

明久

「ねえトウガ、今なってる仮面ライダーの名前って何なの？いい加減『？？？』じゃ分かんないでしょ？」

それ言っちゃダメです、明久。

？？？

「ん？名前？名前は仮面ライダーの二人から聞いたよ。」

セイバー

「セイバー。仮面ライダーセイバーだってさ。」

続く

第1話「誕生！剣を使いし仮面ライダー！でもブレイドじゃないよ。」後編（後

次回、『仮面ライダー始めてみました。』は・・・

「それじゃあ説明します。」

「断る。」

「これが、セイバーの剣です。」

「ちょ、これが僕達が行く最初の世界！？」

第2話「トラウマを斬り裂け！セイバーの剣！」

薙ぎ払え！正義の剣で恐怖と悪を！！

第2話「トラウマを斬り裂け！セイバーの剣！」前編

<トウガ視点>

白い電車の中に入った自分達は（自分は変身を解除）、中へ進んで乗客室に入ると、さつき顔を出したサクラ姉さんと8歳くらいの少女、気弱そうな少年と奇抜な格好の乗務員さん。そしてやさしそうな青年と・・・赤鬼。

???（赤鬼？）

「赤鬼じゃねえよ!!」

あの、他人の思った事にツッコまないで下さい。

明久・ライ

「・・・・・・・・（プルプル）」

ん？どうした二人とも。

明久・ライ

「『いいいいいいやつほおおおお！！！！！！！』」

トウガ

「うおっ！何だよ急に叫びだして！？」

明久

「叫びたくもなるよ！だって今僕達デンライナー（この電車の名前）に乗ってるし、仮面ライダーの2人とモモタロス（赤鬼）が目の前にいるんだよ！？（喜）」

ライ

「そーだよ！こんなの滅多にお目にかかれないよ！？（喜）」

トウガ

「さっきまでは叫ばなかったのに？」

明久

「あん時は非常事態だったから叫ぶ暇なんて無いでしょ!？」

まあ、そうだけども・・・

サクラ

「え」と吉井君達、とりあえず喜ぶのはもうちよつと後にしましょう。おいてけぼりの子がいますから。」

明久

「え?・・・あ。」

姫路

「・・・・・・・・(ぼけ)」

姉さんがそう言いながら指差す所を見てみると、姫路さんがもう頭にお花畑ができてるかのような顔をしていた。

「姫路さんに説明中」

姫路

「えーと、つまり今いる人たちは、特撮アニメ、仮面ライダーのお話に出てくる人たちなんですね？」

明久

「うん。ごめんね姫路さん、分からないのに僕達だけ変に盛り上がっちゃって。」

姫路

「いえ。それよりも、どうしてその仮面ライダーさん達が実在してるんですか？」

「??？」

「実在している世界もあるんです。もちろん、この世界にも。」

姫路さんの問いに、気弱そうな少年が答える。　っていうかこの世界にもってもしかして・・・

ライ

「え、嘘！？この世界にも本物の仮面ライダーがいるの！？」

????

「うん。それも目の前に。」

少年は、そう言いながら自分に視線を送る。　あーやっぱり・・・

明久・姫路・ライ

「「「え、トウガ（兄ちゃん）（梶原君）が（ですか）！？」」」

自分か・・・

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

その後、少年達の紹介が始まった。少年の名が『野上良太郎』、青年が『小野寺ユウスケ』さん、少女が『コハナ』ちゃん、乗務員さんが『ナオミ』さん。

良太郎

「それじゃあそろそろ説明します。」

明久

「説明？」

良太郎

「どうして僕達がこの世界に来たのかを。」

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

それは、仮面ライダーディケイドが、スーパーショッカーを潰し、新しい旅が始まった後だった。

良太郎

「そして残った僕達は、梶原トウガさんの持つてるメモリで、この世界の仮面ライダーと、カードになった仮面ライダー達を復活させて、オメガシヨッカーにまた立ち向かおうと、この世界に来たんです。」

トウガ

「なるほど、大体分かってきた。大方メモリの方はあなたが持っていた物で、何かのはずみで落つことしたってわけですか？」

良太郎

「あ・・・うん。（汗）」

トウガ

「やれやれ、そーゆー大事な物はとっときなよ・・・。」

呆れる自分。だってそうでしょ？世界の運命を握りそんな物を道端に落つことすってどうよ？自分が拾ってなきゃこの世界・・・いや、全世界が終わってたよ？

明久

「ところで、トウガの持つてるメモリって、仮面ライダーWのメモ

リと似てるけど、これってオリジナル？」

良太郎

「はい。士さん以外の仮面ライダーWの世界に行った人が、ガイアメモリを分析して開発したメモリなんです。」

ライ

「ふえー、メモリを作った人か。一体誰だろう？」

ライがそう言っていると、良太郎がこう答えた。

良太郎

トウガ・明久・姫路・ライ

祖父さん！行っただのおお！？いつの間に！？

良太郎

家計が苦しいからって連絡で、兄者と姉さん実家へ戻った年じゃねえかああああ！（注：前作の23時間目参照）何で実家でコツコツとメモリ作ってたの！？

「あ、じゃあもしかしてサクラさんがこの電車に乗っているのは、」

サクラ

「はい。お祖父様のお手伝いしましたから、メモリとベルトのメンテナンスぐらい出来ますので。」

トウガ

「なるほど、セイバー専用の整備係という訳ね。ところで兄者は？
ほとんど姉さんと一緒にいるはずだけど。」

サクラ

「兄さんは、黒タイツの『イー』って言う人に捕まっちゃいました。
(汗)」

トウガ

「あの人はあああああ！こんな時に限ってザコに捕まるってどんだけだよ！？(汗)」

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

良太郎が皆に説明してる中、デンライナーの外では・・・

?
?
?

「
・
・
・
・
・
」

何かが待ち伏せしていた。

第2話「トラウマを斬り裂け！セイバーの剣！」前編（後書き）

中々筆が進まない・・・

トウガ「情けないなあ、ネタ切れか？」

いや、ネタはバリバリ出てくるんだけど・・・

トウガ「じゃあ何だ？」

シリアスが苦手だからどう書けばいいか分からない。（泣）

トウガ「ほんつとうに情けねえ。読者様が泣くぞ？」

仕方がないんだよ！しみりとか感動シーンとかそうゆう系はなにかと恥ずかしいんだよ！！

トウガ「なんだよそれ・・・。まあこんな作者ですけど、改めて皆さん、生温かい目で見えてやって下さい。」

中編へつづく。

第2話「トラウマを斬り裂け！セイバーの剣！」中編その1

<明久視点>

良太郎

「トウガさん。お願いがあります。」

唐突に、良太郎さんがトウガに尋ねる。

トウガ

「大体分かる。『仮面ライダーセイバーになって一緒に戦ってくれ』でしょ？」

良太郎

「あ、はい。」

トウガ

「別に構わないよ。力を貸しても。」

そう言ってトウガが即答する。ていうかいいの？

トウガ

「いいんだよ、面白ければ。」

面白で決めるのはどうかと思うんだけど！？

良太郎

「あ、ありがとうござい」その代りと言っちゃあなんだけど」「？」

良太郎さんがお礼を言いきる前に、トウガがいきなり何かを言っ
て遮る。

トウガ

「条件がある。」

良太郎

「条件、ですか？」

トウガ

「ん。姉さん、あなたが隠してる物出して下さい。」

サクラ

「あゝ、ばれてましたか。」

そう言つてサクラさんが、後ろから長方形の箱を取り出しトウガに渡す。そしてトウガがその箱のフタを取ると、出てきたのは刀身が白く、刃が青い綺麗な剣。良く見ると、鰐あたりが『S』と書かれていて、柄の所に何かを差し込むスロットがある。

明久

「それって・・・」

サクラ

「これがセイバーの剣です。名前は『セイブレイダー』です。」

ライ

「かつこいゝ。」

うわお、ライ君目輝かせてるよ。所でトウガ、条件ってなんなの？

トウガ

「この剣は捨ててくれ。それが条件だ。」

皆

「えええええええ！？」

はい、本日2回目の驚き。・・・じゃなくて！

明久

「ちよつとトウガ！何言つてんの！？」

トウガ

「？捨ててくれって言ったけど？」

いやそうだけどうじゃなくて！ていうか何で『当たり前なのに何言ってるんだこいつは？』って顔しないでよ！！

ライ

「トウガの兄ちゃん！捨てるなんて勿体ないよ！！ていうか何で使わないの！？」

トウガ

「悪いね、自分剣は使いたくないんでね。男なら拳一つで充分だろ。」

「

明久

「だったらセイバーに変身する意味無くなるじゃん！！」

トウガ

「あーもー、とにかく自分は剣は使わない。だから捨てて。」

そう言っつてトウガはデンライナーから降りる。ちよつと、どこ行くの！？

「他に怪物いないか見回りだ。」

あらあら、やっぱりまだ引きずってますか。

「全く、どうしてトウガは剣を使いたくないのかなあ。」

「とう君昔、剣道やってたんです。」

?

|| || || || || || || || || || || || || || || ||

トウガの小学生時代、兄と姉は聖王学園、トウガは実家の近くの学校に通っていた。

実家では、トウガ達の父、『梶原ソウガ』が道場の指導をしていて、父からは強制的に道場に入れられた。そこでの稽古は厳しく激しかったため、稽古初日からトウガの顔はボコボコになっていた。

そして来る日も来る日もトウガは稽古を続け、体は段々鍛え上げられていた。・・・が、何故か勝負では連戦連敗だった。

それでもトウガはめげずに、人一倍努力した。そしてその努力に結果が出たのか、トウガは試合に出る事になった（中堅）。

それからしばらくして、試合での勝利で名が売れたのか、道場によく喧嘩が吹っかけられていた。……だけど、

少年トウガ

「（ちえ、皆によく喧嘩を吹っかけてるのに僕だけ来ないってどんだけだよ。そこまで弱くないっての。）」

トウガがそう思いながら実家へ帰っていると、

少年トウガ

「ん？」

トウガの友達が喧嘩していた。もう既にトウガの友達の勝利で終わったが。

少年トウガ

「（うつわあ、あいつ一人で三人を相手したの？スゲー。）」

喧嘩を吹っかけられたのは・・・

友達

「二度とあいつを笑い物にするな！あいつは俺達の仲間、梶原トウガだ！！」

名が売れたからじゃなかった。

皆優しかった。だからこそ、自分は剣道をやめた。

自分みたいな落ちこぼれに、剣を握る資格なんて無いのだから。

第2話「トラウマを斬り裂け！セイバーの剣！」中編その1（後書き）

中編その2へ続く。・・・やっぱりシリアスは苦手。（泣）

第2話「トラウマを斬り裂け！セイバーの剣！」中編その2

<トウガ視点>

トウガ

「はああああ〜」

学校の周りをぐるぐると見回りながら、思いっきりため息を吐く。
「嫌なもん思いだしちまったよ」

トウガ

「」

一旦止まり、後ろを向く。するとそこにいたのは、

「」

「」

全高3メートルくらいの青いロボット。良く見てみると、背中と腰にガトリング砲が付いている。どうかのゲームで見た事あるぞ。確

か名前が、

????

ジャキガンオー

『邪鬼銃王。』

トウガ

「？」

自分が言おうとした瞬間、青いロボット、『邪鬼銃王』が名乗った。
・・・いや、邪鬼銃王の口から
声が聞こえた。もしかして・・・

トウガ

「誰かがそいつを動かしてる？」

ドールドールパント（以後：ドール）

『ご名答。我が名はドールドールパント。邪鬼銃王は、我らオメガシ
ヨッカーがある世界で盗んだ物だ。』

トウガ

「さいでつか。・・・で、何で自分をつきまとうのかな？」

ドール

『これ以上仮面ライダーを増殖させる訳にはいけないのでな。我らオメガシヨッカーの計画のために。』

トウガ

「計画？何だいそれは？ていうか増殖って、虫かよ仮面ライダーは・
・・」

ドール

『それに答える義務は無い。』（ジャキッ！）

邪鬼銃王の腕がガトリング砲に変わり、自分に狙いをつける。

トウガ

「あっそ、じゃあ邪鬼銃王をぶっ飛ばした後にお前をぶっ飛ばして吐かせるとしよう。」

《セイバー！》

さっきの会話中、ささっと付けたベルトにメモリを差し込み、

トウガ

「变身！！」

《セイバー！》

仮面ライダーセイバーに変身する。

＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝
＜ライ視点＞
＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝

サクラ

「
というわけなんです。
」

なるほど、トウガ兄ちゃんにそんな事が……。サクラ姉ちゃんのお話でほとんどがしんみりしてる。

モモタロス

「くううううう!!」(号泣)

一人(?)を除いて。

明久

「・・・・・・・・」

そんな中、明久兄ちゃんが何か考えてる。・・・・・・・・バカな顔して。

明久

「ちょっとライ君、なんか僕に失礼な事考えなかった？」

ライ

「いんや何も？」

姫路

「どうかしました？明久君。」

明久

「いや、トウガの剣嫌いどうしたら直るかなって。」

ライ

「え？別に直さなくてもいいんじゃない？」

明久

「でも、ずっとこのままって訳にもいかないじゃん。しかも今は大変な事態なんだし。」

ライ

「まあ、そうだけど「ドカアアアン！！」さあ！？」

僕が言いきる前に、凄い震動と爆音が響き渡る。何事！？

モモタロス

「ぐすつ・・・どうやらまた敵さんのお出ましのようだ良太郎。」

良太郎

「うん。行こう、モモタロス。ユウスケさん、ここを頼みます。」

ユウスケ

「わかった！良太郎君も気をつけて！」

良太郎

「はい。」
「あ、あの。」
「？」[illegible]

ダダダダダダダッ！！

セイバー

「ぬううううう！」
（チュンッ！チュンッ！チュンッ！）

撃ってくる弾を避けまくる自分。中々相手に攻撃できない。

ドール

$$(\dots \vdash T_i T_j T_k T_l) \quad \cdot \quad \cdot \quad \cdot \quad \cdot \quad \cdot \quad \cdot \quad \cdot \quad \cdot \quad \cdot$$

すると今度は、肩のシールドが開き、ミサイルがこっちに向かって発射する。ヤバ！

セイバー
「でiiiiiiii!」(ダンッ!)

ドカアアアアン!!!

セイバー
「どわああ!」(ドカツ!)

ジャンプして直撃は避けたものの、爆風で吹っ飛ばされて壁にぶつかる。いったい。

ドール
『中々しぶといな。しかし、避けてばかりでは我と邪鬼銃王は倒せんぞ。』

セイバー
「うつせえ、そっちがバンバン撃たなきゃ、邪鬼銃王なんざ一捻りだよ。」

ドール
『減らず口を、そろそろ終わらせてやる。』

そう言いながら、邪鬼銃王からまたミサイルが飛んできた。ヤベ、
今ので体が動かない。直撃かよ・・・

電王

「でええりやあああ」(ズバツ！ズバツ！)

ドカアアアアン！！

するとどこからともなく電王が現れて、ミサイルを斬り落として自分を助けてくれた。

電王

「おい、大丈夫か？セイヤアア。」

セイバー

「サンキュー、助かった。でも自分セイバーだから。掛け声みたいな名前じゃないから。」

そんなやりとりしていると、

明久

「トウガー！」

明久が遅れてやって来た。背に何かを背負って。

セイバー

「どうした明久、何しに来たんだ？」

明久

「いや、トウガにお願いがあつて。」

そう言いながら背負つてた物をおろす。お願い？なんだよ？

明久

「トウガ、この剣を「嫌だ。」使つて。「無理。」セイバーらしく、却下。」これで「諦める。」敵を「お断りだ。」倒して・・・つて断りすぎでしょ！？言い切る前に五回も否定されるのは生まれて初めてだよコンチクショーー！！」

お前が人の話を聞かないからだろ？全く。

電王

「いや、それはお前もだろ。（汗）」

電王がなんかつつこむがスルー。

セイバー

「剣は使わないって言うてるだろ？何でそこまで使わせたいんだよ。」

明久

「サクラさんから聞いたよ。剣道の事。」

全く。姉さん、あんたって人は……

明久

「トウガ、使いなよ。」

セイバー

「いーやーだ。話を聞いたのなら尚更使いたくないね。」

明久

「確かに、その時は足手まといになりたくないから剣を使うのやめたんでしょ？でもさ、今は皆の足手まといになってる？」

セイバー

「……」

明久

「だったら使おうよ。今度は足手まといになりたくないから剣を捨てるんじゃないで、足手まといになりたくないよう強くなって、剣を握り続けるようにさ。」

セイバー

「……はあ。バカにそんな事言われるのは心外だな。」

明久

「ちょっと！？君の為に言っただけで「明久。」？」

セイバー

「ありがとよ。昔の事はまだ振りきれんが、今ので少しスツとした。だから剣よこせ。」

明久

「トウガ・・・うん！」

自分の言葉に明久が頷き、自分に剣を渡す。

ドール

『話は終わったか？長いんでゲームしてた。』

セイバー

「ああ、悪いね待たせちゃまって。て言うかお前柔軟性あるな。あつ、それと邪鬼銃王にドールドーパント。」

ドール

『？』

セイバー

「覚悟しな。今日の自分は気分がいい。」

第2話「トラウマを斬り裂け！セイバーの剣！」中編その2（後書き）

やっと書けた中編その2。後編へつづく。

第2話「トラウマを斬り裂け！セイバーの剣！」後編（前書き）

しばらく更新が遅くなりそうです。すみません・・・（汗）

第2話「トラウマを斬り裂け！セイバーの剣！」後編

<トウガ視点>

さーて、邪鬼銃王は自分が相手をするとして、ドールはどうしようかなあ。操ってるから近くにいたとは思っけど………ん？

セイバー

「……モモタロス。」

電王

「ん？何だセイラー。」

セイバー

「セイバーだよ。初代ガンダムに出てくるキャラでもないから。まあそれは置いて、……（ごによごによ）……分かった？」

電王

「は？全然見えねえんだけど。」

セイバー

「よく見とけば分かるよ、と言っ訳で頼むよ。」

ドール

『?何を話している?』(ドドドドドッ!!)

またミサイルがこっちに飛んできた。よしっ!

セイバー

「散開!」(ダッ!)

電王

「おう!」(ダッ!)

自分の合図でお互い逆方向に逃げる。

・・・と見せかけて、

ドカアアアン！！

セイバー

「よし！」（ダッ！）

電王

「うっし！」（ダッ！）

かわしたミサイルの着弾点、つまり煙の中に入る。

ドール

『？なんのつもりだ？』

ドールが自分達が何してるのか分からずにいた。

セイバー

「うおおおおお！！！」

そしてその煙の中から自分が飛び出す。

ドール

『やれやれ、無謀すぎだ。』（ダダダダダッ！！！）

邪鬼銃王が、腕のガトリングで自分を狙い撃ち放つ。だけど、

セイバー

「でやああああ！！」（ギギギギギンッ！！！！）

さっき明久から受け取った剣、セイブレイダーで弾を全部弾く。

ドール

『なっ！？』

今の行動に驚くドール。今がチャンス！！

セイバー

「っらあああああ！！」（ズバンッ！！）

邪鬼銃王の懐に入り、両腕を斬り落とす。

ドール

『つくー！！』（ジャキッ！）

驚いていたドールが我に帰り、胴体の装甲を開かせて仕込み銃を出す。だけでもう遅い！！

《セイバー！マキシマムドライブ！》

両腕を斬り落としてすぐに、メモリを剣の柄に差し込んでいた。そしてそのまま、

セイバー

「おりゃあああああ！！！！」

邪鬼銃王の、左肩から右の横つ腹を・・・一閃！！！！

したのだが・・・

ドール

『・・・・・・？なんともない？』

そう邪鬼銃王には、斬り裂いた痕どころか、斬り傷一つも無かった。

ドール

『ふっ、どうやら当たらなかったようだな。こんどこそ・・・・・・』

「」

キュウウウウウン・・・

ドールが言っているにも関わらず、自分は柄に差し込んだメモリを抜きだす。・・・すると、

ズシャアアアアア！！！！

邪鬼銃王を斬った所から、思いっきり斬り落とされる。

セイバー

「・・・チェックメイトだ。」

そして自分がそう言った瞬間、

電王

「悪いが、そうはいかねえ。」《フルチャージ!》

ドール

「!？」

電王

「俺の必殺技パート1!!」(ズバアアッ!!)

ドール

「ぐわああああ!!」

電王の必殺技をモロにくらっつドール。

ドール

「ぐ……なぜ、ここだと分かった……」

ボロボロになりながらも、ドールが電王に尋ねる。

電王

「あいつから言われたんだよ。『あいつ糸を使って邪鬼銃王を操ってるからそれを辿ってドールを仕留めてくれ。』ってな。」

ドール

「くそ、見えないほどの糸を見破ってたとは……」

電王

「さてと、さつさと吐いて貰おうか。お前らの計画って奴を。」

悔しがるドールを気にせず、今度は電王が尋ねる。

ドール

「……悪いが、それはムリな相談だ。」

電王

「何だと？」

ドール

「こうなるからさ。」
「（ぐしゃあああ！ー！）（

電王

「なっ！？」

ドールが言い終わると、ドールの顔が爆発した。それと一緒に、メモリが砕けていた。

電王

「メモリに爆弾かよ．．．くそ！」

結局、敵から何も得る物は無かった。

[illegible]

トウガ

「それで、これからどうするんすか？」

戦いが終わった後、デンライナーに戻ったトウガ達が休んでると、トウガがそう言ってきた。

良太郎

「あ、えっと、カードになった仮面ライダーと、行方不明になった
ディケイド、土さんを色んな世界で探す予定です。」

トウガ

「了解、とりあえずそれも手伝いますわ。」

明久

「??とりあえずそれも?」

トウガ

「敵に攫われた兄者や、いなくなった生徒を見付けたいんで、そっちを優先にして動きたいんですけど。」

トウガの言葉で「あ、そういえば」って顔をする明久とライ。こいつら忘れてたな。

良太郎

「もちろん、それを優先してくれて構わないよ。手伝ってくれるだけありがたいですから。それじゃあ次の世界に行きましょう。」

トウガ

「おう。・・・所でどうやって?」

ユウスケ

「あ、俺が案内するよ。」

そう言ってユウスケさんが、ある所に案内する。

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

そして自分達が着いた所は、乗客室の隣の部屋、なんとディケイドに出ていた光写真館と繋がっていた。

ユウスケ

「あの背景ロールを操作すれば、次の世界に行くよ。」

ライ

「おっけー!」

そう言ってライが弄くり回す。

トウガ

「おいおい、調子にのって壊すなよ。」

ライ

「分かってるって。」

パアアアアア・・・

そして捲られた背景ロールに絵が浮かび出す。・・・が、

明久

「え！？これが僕達が行く世界！？」

明久が驚く。なぜならその絵には、

赤い屋根、白い壁、大きな煙突、そして近くにパンの形の犬小屋があるパン工場の絵だった。

第2話「トラウマを斬り裂け！セイバーの剣！」後編（後書き）

次回、『仮面ライダー始めてみました。』は・・・

???「ハーヒーヘー!!」

???「倒したいか？」

???「あれ？お前らどうしてここに？」

???「アンパーンチ!!」

第3話「それゆけ！空を飛ばたく正義のパン」

薙ぎ払え！正義の剣で恐怖と悪を!!

第3話「それゆけ！空を羽ばたく正義のパン」前編（前書き）

読者の皆さんお待たせしました。年末年始の後、家を引っ越しましてしばらくできませんでした。今日から次の日曜まで、たくさん書く予定です。これからもよろしく願います。

第3話「それゆけ！空を羽ばたく正義のパン」前編

<トウガ視点>

背景ロールの絵が浮かび出た後、写真館の入り口から出てみると・

トウガ

「……………うわあ。」

明久

「ホントに来ちゃったね……………」

背景ロールに出てきた絵と同じ世界、『アンパンマン』の世界の町だった。

ライ

「わ……色んなキャラがいる……………」

そう言いながらライがキョロキョロ見回してる。自分も見回すと、

確かに色々いる。

ドンブリの3人組

全身ドーナツのなにか

豚まん作っている豚

そしてたくさんの動物（？）達が、皆仲良く暮らしていた。

トウガ

「さて、良太郎さんとユウスケさんがカードを探してる間に、こっちも生徒と兄者を探すでしょう。」

ライ・明久・姫路

「「「おう！（はい！）」」」

こうして自分達の、生徒＋兄者探しが始まった。

???

『ハーヒフーへホー!!』（ズシン!ズシン!）

と思ったら、急に町に大きなロボットがやって来た。何この最悪なタイミングは?ていうかさっきの声って・・・

ばいきんまん

『このだんだん2号で町を壊し、俺様ばいきんまんの新しい城を作るぞー!!』

やっぱりばいきんまんか・・・

明久

「ちょ、どうするトウガ!?!」

トウガ

「どうするかって?そんなもん決まってる。」

そう言いながら自分は、ロストドライバーとセイバーメモリを取り出し、

トウガ

「あれをぶっ飛ばす!!」 《セイバー!》

ロストドライバーを腰に付け、メモリを起動させる。

トウガ

「変身!」

そしてメモリを差し込んで、仮面ライダーセイバーに変身する。

セイバー

「おい!ばいきんまん!!」

そして自分はばいきんまんを呼び掛ける。

ばいきんまん

『ん?誰だお前は?』

セイバー

「覚悟しろ！今日もお星様にされる事に！！」

|| || || || || || || || || || || || || || || ||

<???視点>

今日も困ってる人やお腹を空かした子はいないかなあ。そう思いながら空を飛びながらパトロールをしていると・・・

ドカアアアアン！！！！

町の方で爆発音が聞こえた。

????

「何だろう?」

気になった僕は急いで町の方へ飛んで行った。

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

<トウガ視点>

セイバー

「くそ!中々硬いなこのロボット!」

あの後自分はロボットに、連撃を当てまくるが装甲が硬く、ダメー
ジがほとんどない。

ばいきんまん

『なーっはっはっは！！このだだんだん2号は、ちよつとやそつとの攻撃は通じないのだー！！』

なるほど、そうですか。・・・だったら、

セイバー

「ちよつとやそつと以上の攻撃なら壊れるってわけだな？」《セイバー！マキシマムドライブ！！》

ばいきんまん

『は？』

セイバーメモリをマキシマムスロットに差し込み、

セイバー

「トウッ！！」（ダンッ！！）

自分は空高く跳び上がる。そして一定の位置までくると、右足を高く振り上げる。すると右足に光が集まり大きな剣となり、それを口ポット目掛けて振り落とす！！

セイバー

「おりゃああああ!!!!」

ズバアアアアアン!!!!

そしてロボットは見事、頭から真つ二つに斬られ、

ドガアアアアアン!!!!

爆散した。……だが、

ばいきんまん

「くそ、よくもやったなあ!!」

危機一髪の中で、ばいきんまんはUFOで脱出した。しぶといな。

セイバー

「っち、今の爆発でぶっ飛ばされればいい物の・・・」

明久

「・・・トウガ、その言い方まるで悪役だよ。（汗」

ライ・姫路

「（こくこく）」

明久がなんか言ってるがスルー。その隣で二人が頷いてるがそれもスルー。

ばいきんまん

「これでも喰らえ!!」

そう言いながらUFOからマジックハンドが出てきて、自分に目掛けてパンチを繰り出してきた。

セイバー

「なんのぉ!!」

こっちも負けじとパンチを繰り出そうとしたその時、

???

「アンパンチ!!」

誰かが自分の代わりにUFOを思いっきり殴り飛ばした。

ばいきんまん

「バイバイキン!!」(キラ〜ン)

そしてばいきんまんを乗せたUFOは、そのまま空のお星様となった。うん、お約束だね。

???

「大丈夫ですか？その君たちも。」

茶色いマント、赤い服、そしてパンの顔のヒーローがそう自分達に声を掛ける。

姫路

「あ、はい。大丈夫です。」

明久

「大丈夫です！。」

ライ

「こっちも大丈夫！。」

セイバー

「ん、問題ないっす。」

そして全員、大丈夫だと答える。

アンパンマン
「よかったー、僕アンパンマンです。よろしく」

第3話「それゆけ！空を羽ばたく正義のパン」前編（後書き）

中編へ続く。今週は頑張っ て日曜までたくさん書きます。よろしく！

第3話「それゆけ！空を飛ばたく正義のパン」中編その1

<トウガ視点>

セイバー

「あ、どうも。自分は仮面ライダーセイバーこと、梶原トウガです。」

アンパンマンが軽く挨拶と自己紹介してきたので、こっちも対応。

セイバー

「そしてこっちは友達の・・・」

明久

「・・・え？あ、こんにちは、吉井明久です。」

ライ

「どうも、雷シユンスケです。僕の事はライって呼んでもいいよ。」

姫路

「ひ、姫路瑞希です。」

紹介を他の皆に回すと、少し戸惑ったが落ち着いて自己紹介する。

アンパンマン

「うん、皆よろしく。所で、君たちここら辺じゃあ見かけないけど、どこから来たの？」

セイバー

「あゝ、話せば長くなるんだけど、実は「ぎゅるるるるる」・・・」

ライ

「あっはははゝ（汗）」

アンパンマンが質問してきたので自分が答えようとした矢先、ライの腹から大きな腹の音が鳴った。ホント何？この変な狙いすましたかのようなタイミングは・・・

アンパンマン

「あはは。そうだ、よかったらパン工場でお話する？ジャムおじさんならおいしいパンをごちそうするよ。」

そう言ってアンパンマンがパン工場へ自分たちを招待する。

トウガ

「ん、わかった。話はそこでしよう。」

変身を解除して、そう答える自分。まあ長い話になるし、ライ以外にも明久と姫路さんもお腹空いてるようだし。なにより、ヒーローに招待されるのは滅多にないからね。

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

町から約徒歩20分、やっと来ましたパン工場。うん、外なのにパンの焼けた匂いが漂ってる。

ライ

「くんくん。うん、いい匂い。」（ぎゅるるるるるる〜）

そう言いながらさらに腹の音が増すライ。ていつかよだれよだれ。

アンパンマン

「もう少しの辛抱だから待ってね。」

そう言いながらアンパンマンは、入口のドアを開けて入る。

アンパンマン

「ただいまー。パトロール終わりました。」

するとパン工場の人達が、アンパンマンの帰りを迎える。

ジャムおじさん

「おお、お帰りアンパンマン。」

バタ子さん

「アンパンマン、お疲れ様。」

メロンパンナ

「おかえりー！」

チーズ

「アンアンー!!」

????

「おう、アンパンマンお疲れさんー!!」

最後の人の瞬間、自分はこけた。何故かって？

ヤイバ

「おろ？ トウガじゃん。 どうしてココに？」

トウガ

「いや兄者！それはこっちのセリフなんだけど！」

攫われたはずの兄、梶原ヤイバがパン作りの手伝いをしていた。

[illegible]

その頃、バイキン城では・・・

ばいきんまん

「あー！悔しい悔しい悔しい！！アンパンマンめ、人が戦つてゐる最中に割り込みながら俺様をぶつ飛ばすなんてー！！この恨

み、何十倍・・・いや、何百倍!!・・・いや、何千倍!!・・・いや、何万倍にして返したいーーーー!!!!!!」

あまりの悔しさに、ばいきんまんはゴロゴロ転がりながら喚いていた。というか人かお前？

ドキンちゃん

「はぁ・・・全く、いつになったらアンパンマンを倒せるのかしら・・・」

そんなばいきんまんを見て、呆れながらホットケーキを食べながら言うドキンちゃん。

ホラーマン

「ホラホラ、さすがにもしかしたら、アンパンマンを倒せるのは一生無理かもしれませんかね。」

その隣でそんな事ばやく、全身骸骨のホラーマン。

ばいきんまん

「うるさーい!!くそ、どうやってアンパンマンを倒せるん

だ・・・うゝ、倒したい倒したい倒したい――!!!!」

???

「その欲望・・・解放しろ。」

┐
•
•
•
h
?
└

P

アンパンマン

「そんな事が……」

134

「今の所、計画とは一体何なのか謎のまま。だから何を仕掛けてくるか分からない。」

ヤイバ

「だから急いでカードを集めて、仮面ライダーを復活させてオメガショッカーをぶっ潰そうって訳か。」

トウガ

「そゆ事。まあいなくなつた生徒を探すのを優先だけど。・・・ていうか兄者、姉さんから攫われたって聞いたけど、どうしてここでパン作りの手伝いを？」

ヤイバ

「ああ、捕まつた後変な装置に放り込まれてな。多分ワープ装置みたいな物だと思うが、そん中で暴れていたらこの世界に着いてな。」

トウガ

「それって暴れてどっか壊して、この世界にほっぽり出されただけじゃね？相変わらず危ないなあ・・・（汗）」

ヤイバの無謀さに呆れるトウガ。・・・すると、

『わあああああ！！』

『きゃああああ！！』

町の方からたくさんの悲鳴が上がる。

ヤイバ

「ん？なんだ？」

トウガ

「・・・もしかして、またばいきんまんが暴れてるか？懲りないなあ・・・」

アンパンマン

「僕、見てきます。」

ジャムおじさん
「頼んだよ。」

アンパンマン
「はい。」

トウガ
「自分も行こう。自分も言っというて何だが、ばいきんまんじゃなく、オメガシヨッカーの奴らかも知れないから。」

アンパンマン
「うん、分かった。行こう！」

トウガ
「おう。」

||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||

<トウガ視点>

そして町へ来て見ると・・・なんじゃありゃ!?

???

「・・・・・・」

なんか、虫のような怪人がこちらをジーっと見ている。なに? なの?

???

「・・・・アン、パン、マン・・・・」

ん? 今相手、アンパンマンって言った?・・・あ、嫌な予感g

???

「タオス!!!」(ダッ!!!)

的中!!!!!! ヤバい! こっちに向かってきた!!!

トウガ

「くそ！《セイバー！》変身！！」

町に着く間に付けたロストドライバーにメモリを差し込み、

《セイバー！》

仮面ライダーセイバーに変身する。

セイバー

「よし行こうかアンパンマン！！」

アンパンマン

「うん！！」

そして自分達は怪人へ突っ込む。一体何が起こったんだ？

第3話「それゆけ！空を羽ばたく正義のパン」中編その1（後書き）

後編へ続く。次回の後編は長めです。楽しみに。

第3話「それゆけ！空を羽ばたく正義のパン」中編その2

<サクラ視点>

サクラ

「できましたー！！」

とう君達が行っている間、私はデンライナーの中で今までコツコツと作っていた物がやっと完成しました。・・・え？デンライナーの中のどこで作ったのかって？そのへんは気にしないで下さい。

サクラ

「さて。ではこれをとう君の所まで持っていけますか。」

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

<トウガ視点>

ガイン！ガキン！！ガアアア！！

だー！！無茶苦茶硬いなこいつ！変身した後から剣で斬り続けているのに中々ダメージが無い。

アンパンマン

「アーンキーク！！」（ズドン！！）

アンパンマンも、パンチやキックで怪人に当てまくっている。・・・

？？？

「又アアアアア！！」（ぶんっ！！）

アンパンマン

「うわっ！！」（ドゴス！！）

やっぱりダメージが無い。ていうか今の怪人の攻撃でアンパンマンの顔が凹んでしまった！！

セイバー

「アンパンマン！一旦下がってパン工場に『そうはいくか！』！
」

アンパンマンに新しい顔を取り替えてきてと言おうとした間に、誰かが遮った。その声が聞こえた方を向くと、マジックハンドが自分に殴りかかろうとしていた。

セイバー

「ぬおおおお！！！」（ぶんっ！！）

そして自分はそれをなんとか避け切った。あつぶね！！ていうか今のって・・・

ばいきんまん

『ハーヒフーへホー！やるなお前！！』

さっき吹っ飛ばされたばいきんまんだった。やっぱりお前か!!

アンパンマン

「ばいきんまん!! また君の仕業だな、やめるんだ!!」

ばいきんまん

『なーっはっはっは!! そうはいかない! オメガシヨツカーのおかげで、俺様はヤミーといういい物を手に入れた!! そいつがいれば、念願のアンパンマンを倒す事ができるんだからな!!』

ばいきんまんの話を聞いて軽く舌打ちする自分。くそ、オメガシヨツカーがここまで侵攻してるとは・・・

ばいきんまん

『まああいつらの計画を手伝うという条件で手に入れたというのは少し嫌だが、これもアンパンマンを倒すためだ!!』

計画? あいつもしかしてやつらが何を企んでいるのか知ってるのか?・・・よし、ちょっと聞いてみるか。

セイバー

「計画？なんだそれ？」

これで引つかかってくれるとは思えないが、そう自分は尋ねる。

ばいきんまん

『ん？それはだな・・・』

引つかかってくれたよ。こいつバカだ。

セイバー

「それは？」

ばいきんまん

『それはだな・・・・・・・・お前らには関係ない！・・どうせこ

ここで俺様に倒されるのだからな！！！！』

うわ！こいつ忘れたか、オメガシヨッカー一味の話聞いてなかったな！！！！やっぱこいつバカだ！明久並みに！！

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

明久

「ぶえつくしよん！！」

ヤイバ

「うお！？どうした明久、風邪か？」

明久

「ん、もしかしたら僕の噂じゃない？」

ヤイバ

「お前がバカだって事？（笑）」

明久

「失礼な！！（怒）」

[illegible]

ばいきんまん

『さあ！そろそろとどめをさせ、ヤミー！…！』

ばいきんまんがヤミーにそう命令すると、

ヤニ

「グオオオオオオオオオオ！！！！！」（メキメキメキ！
！！）

ヤミーが段々大きくなり、さっき倒したロボットと、ヤミーを足して二で割ったような大きな怪物になった。デカ！倒したロボットよりデカイ！！

ヤニ

「ガアアアアアア！！！！」

するとヤミーは、大きな腕を振り上げる。ヤバ！あれ自分達に振り落とす気だ！！

ヤミー

「ガアアアアアアアアアアア！！！！！！」（ズドガシャアアアーン！！！！！！）

そして自分の予感的中、大きな腕は自分達に振り落とした。・・・

148

セイバー

「ふゝ、あつぶな。」

自分は、アンパンマンを抱えながら全速力で自分達のいた場所から離脱した。

セイバー

「アンパンマン、なんとかここはもたせるから、急いでパン工場で顔を交換してきて。」

アンパンマン

「そんな、君を置いてくなんてできないよ・・・」

セイバー

「今のままじゃどう考えても、二人してやられてしまう。頼む、あいつらに勝つにはあんたの焼きたての顔じゃないとダメなんだ。」

アンパンマン

「・・・分かったよ。顔を変えたらすぐ行くよ。」

やっとアンパンマンが決断し、パン工場まで飛んで行った。

ばいきんまん

『あー！こら逃げるん！どこ見てる！』ん？』

アンパンマンを逃がすまいと追いかけようとばいきんまんを、思いっきり蹴る！！！！

ガイイイイン！！！！

隣ではトウガの仲間が心配そうに窓の外を見ている。すると、

アンパンマン

『ジャムおじさん！』

ボロボロのアンパンマンが、空を飛んでこっちに来た。

皆

『アンパンマン！？』

皆驚く。当然俺も。急いで外を出て、アンパンマンに近づく。

ヤイバ

「アンパンマン！トウガはどつした！？」

俺の問いに、アンパンマンが説明する。

アンパンマン

「トウガ君は今、僕の顔の交換の為に、一人ではいきんまんとオメガシヨツカーと戦ってます！！急いで僕の新しい顔の用意を！！」

ジャムおじさん

「何だって！？バタ子、急いで新しい顔の準備だ！！」

バタ子さん

「はい！！」

メロンパンナ

「あたしも手伝う！！」

チーズ

「アンアーン！！」

マジかよ、アレがあればもう少しマシになるんだがなあ・・・すると、

ブオオオオオオン・・・

どこかで、そんなエンジン音が聞こえた。そんな時、俺は思った。

これならあいつ、勝てるな。

第3話「それゆけ！空を飛ばたく正義のパン」中編その2（後書き）

今度こそ、後編へつづく。ホントは今回の第3話を書き終えようとしたけど、末っ子（2才）が自分が目を離れた隙に、パソコンいじってシャツダウンを・・・

そしてもしかしたら今回までが、またしばらく投稿できなくなりますんで、その時はまた投稿するのを生温かい目で待っていて下さい。

第3話「それゆけ！空を羽ばたく正義のパン」後編（前書き）

読者の皆さん、大変長らくお待たせしました。久々の更新です！

第3話「それゆけ！空を飛ばたく正義のパン」後編

トウガが一人で戦っている中、町の近くの山で高みの見物をしている者達がいた。・・・それは、

ドキンちゃん

「うわゝ、あのヤミィって怪物凄いわね。」

ホラーマン

「ホラゝ、あの仮面ライダーって言う人をあそこまで追い詰めるなんて凄いですねゝ。」

???

「・・・・・・」

ドキンちゃんとホラーマン、そしてさっきの緑のジャケットを羽織った男だった。

ホラーマン

「これなら、アンパンマンも倒せる事間違いないですねゝ。」

ドキンちゃん

「・・・でもばいきんまんの事だから仮面ライダーにもやられそんな気が・・・あら？」

言い終わる前に、ドキンちゃんはある物を目にした。それは、土埃を撒きながら何かが町へ向かっていた。

|| || || || || || || || || || || || || || || ||

<トウガ視点>

ブオオオオン！！

セイバー

「どわあああー！！」

アンパンマンをパン工場に行かしてから数分、ヤミーとばいきんまんの攻撃をよけまくっている。

ばいきんまん

『コラー！いい加減避けるのをやめろー！！』

セイバー

「バカだなあ。普通にその頼みを（ブンッ！）おわ！・・・っと、聞くと思ってる？」

ばいきんまん

『うるさい！！おとなしく俺様達にやられろー！！！！』

ついに痺れを切らしたばいきんまんは、UFOのマジックハンドが無数に出してそれを自分に目掛けて殴りかかって来た。・・・が、

ドカーン！ドカーン！ドカーン！

ばいきんまん

『ぎゃーーーーー！！！？』

その横から弾丸が飛んできて、UFOに見事直撃。ていうか今のつて？

？？？

『とう君ーーーー！』

セイバー

「……………え？」

すると弾丸が飛んできた方向を見ると、バイクに乗った姉さんがこっちに向かってきた。

サクラ

『とう君ー、このバイクはセイバー専用バイク、『アクセルソード』です！これをうまく使って敵さんを倒してくださいー！！（カチッ）』

『

姉さんがそう言い終えると何かのボタンを押して、戦闘機の脱出装置の如く座席ごと姉さんは空彼方へ飛んで行った。・・・ってちよっと待て！バイクが走りながらこっちに突っ込んでくるんですけどー！？

セイバー

「くそ！こつなりやヤケだ！ー！うおおおおお！ー！！」

突っ込んでくるバイクをうまく避け、

ガシィ！！

それと同時にバイクのハンドルを掴み、バイクに跨る。よし、成功！！！！

……ってヤズ、ヤミーがもつ目の前に迫ってきてる。

ヤミー

「ぐわあああああ……！」
「……！」

うーむ、このまま突っ込んでもこっちの負けだなあ。どーやってア
イツ倒そうか・・・そう考えている中、自分はある物を目にした。

セイバー

「ん？これって・・・」

目にしたのは、メーターの所にスロットがあつた。・・・もし
かして、

《セイバー！マキシマムドライブ！！》

あ、やっぱりマキシマムスロットか。よし！

セイバー

「うおおおおお！！！」

乗ってるバイクでウィリー走行のまま、ヤミーに突っ込む。するとバイクの前輪に光が集まり、その光は長い剣のようなものになった。

セイバー

「くらえええええ！！！」

そしてバイクをうまく使い、前輪の剣をやミー振り下ろし、

トウガ

「ただいまー。」

明久達

「「「ただいまですー。」」」

サクラ

「あつ、とう君達おかえ・・・兄さん!？」

ヤイバ

「おうサクラ、ただいまー。」

サクラ

「どうして兄さんがこの世界に!？」

ヤイバ

「あー、じつはな・・・」

「「「説明中」」」

ヤイバ
「と言っ訳なんだ。」

サクラ
「・・・相変わらず無茶苦茶ですね・・・」

ヤイバの出来事に呆れるサクラ。

トウガ
「姉さん、良太郎さん達の方はまだかい？」

サクラ
「ええ、世界は広いですからそこでカードを見つけるには時間は掛かりますよ。」

トウガ
「うゝむ、ここはあの人達に任せて次の世界で友を探すか、一緒にカードを探しに行くか・・・」

自分がそう考えていると、

ヤイバ

「あーもう、何ぐだぐだしてんだよ。もうここはあいつらに任せて次行こうぜ。」

トウガ

「え!?!」

兄者が光写真館の中に入り、背景ロールを弄くり次の世界への絵が浮かび上がった。

トウガ

「兄者……」

ヤイバ

「まあまあ気にすんなって。それよりなんだこれ？」

次の世界の絵には、怪人とヒーローが描かれていて、さらに文字も入っていた。

『悪魔將軍・田中デスダーク 対 絶対勝利マケレンノジャー』と。

ライダー設定（前書き）

今回は、梶原トウガが変身する『仮面ライダーセイバー』の設定を説明いたします。

ライダー設定

・梶原トウガ かしはら 高等部2年 聖王学園Dクラス代表

イメージCV/岡本信彦(?)

バスニグシリーズの主人公(詳しくは、前作のオリキャラ設定で、
『仮面ライダーセイバー』に変身できる人物。

・仮面ライダーセイバー

梶原トウガが、『ロストドライバー』と『セイバーメモリ』を使って変身した姿。容姿は『仮面ライダーW』に近いが、白いジャケットを羽織り、体の色は紺色。頭の角も、左側は長いが右側は短い。腰にはセイバー専用武器『セイブレイダー』を収める鞘を着けている。

パンチ力 12t

キック力 20t

ジャンプ力 ひと飛び85m

走力 100mを6秒

・必殺技

光を手を集め、手刀で相手に突き刺す『ダガーストライク』（パンチ力50t）1話後編参照。

光を足に集め飛び上がり、光が集り大きな剣になった足を、相手に振り落とす『バスタードロップ』（キック力70t）3話前編参照。

『セイブレイダー』で相手を斬りつけメモリを抜き取ると、斬った所のダメージが時間差で出る『デイメンションエッジ』2話後編参照。

・セイバーメモリ（別名：TKCM・？S）
テイクシム

梶原トウガの祖父、梶原コウガが『ガイアメモリ』を解析して作り出したメモリ。『TKCM』^{テイクシム}は、『Type - カジハラカスタムメモリ』の通称。

・ロストドライバー

『仮面ライダージョーカー』や、『仮面ライダースカル』とあまり変わらないセイバー用の変身ベルト。

・セイブレイダー

梶原サクラが、セイバー用に作った両刃剣。容姿は『プリズムビツカー』のソードと似ているが、刀身がやや長めで、鰐あたりの「X」が「S」である。・・・実はセイブレイドには隠し機能が・・・

・アクセルソード

セイバー専用バイク、基調色は青。メーターの近くには、マキシマムスロットが付けられている。

最高時速500？

必殺技ノウィリー走行で浮いてる前輪に光が集まって剣となり、そのまま相手に突っ込む『グレートチャージアタック』

ライダー設定（後書き）

以上、仮面ライダーセイバーの設定でした。

第4話「レベル？絶対勝利で負けんのじゃー！」前編（前書き）

トウガ達が次の世界へ行ったその頃、バイキン城に銀色のカーテンのような物が現れ、そこからさらに赤のバツ印の付いた銀色の球体が現れる。するとその球体が真つ二つに割れ、中から黒いエネルギー体が現れ・・・そして、

そのエネルギー体はブラックホールのような物となり、バイキン城を飲み込んだ。

第4話「レベル？絶対勝利で負けんのじゃー！」前編

<トウガ視点>

兄者の勝手に良太郎さん達を置いて次の世界へとやって来た自分達。やれやれ、これからどうするものか。

明久

「まあとにかく、この世界に聖王学園の生徒がいなか探そう。」

トウガ

「……だな。」

ライ

「それにしても、ココどこ？」

そう言つてライが辺りをキョロキョロ見回す。自分も良く見ると、近未来的な施設が沢山並んでいる。

姫路

「……少なくとも、ここは地球じゃないと思います。」

明久

「え？どうして姫路さん。」

姫路

「だってあれ・・・」

そう言つて姫路さんが空（？）に指さす。その指をさした方に視線を向けるとそこには・・・

赤い地球が月のようにポツカリと浮かんでいた。

明久

「ええええええ！！？何で地球が赤いの！？ていつかそうなるってどこなのー！？」

トウガ

「落ち着けバカ。」（ガンッ！）

明久

「イタッ！？」

明久がパニックだったのでとりあえずセイブレイドの鞘で明久の頭を叩く。

トウガ

「さて、人のいそな所へ行くでしょうか。」

ライ

「相変わらずだね。」

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

どんなトコなのかも分からないまま歩く事数分、中央広場らしき所に出た。・・・のだが、

『ふう、いい訓練になったな。』

『よっしゃ！新しい必殺技ができたぜ！！』

『おゝいてて。』

『お前凄い傷だな。激戦だったか？』

『まあな、返りうちでボコボコにしてやったけどな……あの犬。』

『犬！？怪人と戦ってたんじゃないのかよ！？』

『はっはっは、まっさか。ヒーローじゃあるまいし。』

『じゃあアンタ何！！！？』

たくさんのヒーロー達が、特訓や怪人退治をしていた。……約一名変なのいるけど。

明久

「す、すごいヒーローの数。一体何なんだろココ？」

トウガ

「いやいやいや、ヒーローが特訓してるんだから訓練所だろ？それくらい分かれよ。」

???

「その通り！ここはW・H・S（世界ヒーロー協会）の特訓施設！君達の知ってるヒーロー達はココを巣立っていったんだ。」

ライ

「へへ、凄い所なんだね。」

・・・・あれ？今の誰？

気になって声のした方を向くと、そこには黄色い服に赤いマフラーを着けた男性（頭の上に何か浮かんでる）と、ウサギのかぶり物を着けた女子、そして最後は頼りなさげなヒーロー少年だった。

トウガ

「・・・・どちらさん？」

とりあえず、一体だれなのか尋ねてみる。

ピロ彦

「俺は？元？絶対勝利マケレンノジャーこと、一文字ピロ彦。よろしく！！！」

明久

「？元？？」

ピロ彦

「おう。あの少年が？現？絶対勝利マケレンノジャーだ。」

？現？マケレン

「……………（ペコリ）」

ピロ彦の紹介でお辞儀をする？現？マケレンノジャー。

エトランゼ

「そしてアタシがそいつを鍛えるのをサポートするインストラクター、エトランゼよ。」

そう言つて、エトランゼも自己紹介する。

姫路

「えっと、？元？ってどういう事ですか？」

姫路さんが？元？という事に疑問に思い、尋ねてみる。

ピロ彦

「あー、実はラスボス戦で遅刻してな。急いでいたら車にはねられて死んじゃったんだ。」

明久

「そして背後霊として？現？マケレンノジャーについている訳なんだ。（汗）」

エトランゼ

「でもそいつがとてつもなく弱くって、ラスボスに瞬殺されたけどね。（汗）」

トウガ

「なるほど、大体わかった。つまりそのラスボスのリベンジのため、ここで特訓してたわけか。」

ピロ彦

「その通り！所で君たちは？ココじゃ見かけない顔だけど、新しいヒーロー？」

ライ

「今更だね・・・」

トウガ

「とりあえず、順を追って説明するよ。」

くく説明中くく

ピロ彦

「なるほど。．．．ならトウガ、君も一緒に特訓しよう！．．．」

トウガ

「え？」

いきなり何言い出すの？

ピロ彦

「仲間を救う気持ち、これはヒーローに持っている物の一つだ。君にはヒーローになる資格がある！．．．」

トウガ

「．．．いや、ヒーローの資格とかどうでもいいんだけど．．．」

ピロ彦

「よーし！それじゃあ早速行くか！．．．」

第4話「レベル？絶対勝利で負けんのじゃー！」前編（後書き）

やっと書けた第4話！！中編へ続く。

第4話「レベル？絶対勝利で負けんのじゃー！」中編その1（前書き）

約1か月ぶりの更新です、すみません。

第4話「レベル？絶対勝利で負けんのじゃー！」中編その1

<トウガ視点>

今、自分は裏地球（ジャングル）へ来ています。あの後結局ピロ彦に無理やり連れられて、明久達を置いてきながら来ちゃいました。

トウガ

「しっかしまあ、裏地球その物がヒーローの特訓場所とは。」

ピロ彦

「おう、ヒーローはここ（裏地球）のダンジョンで任務をこなしながら、ヒーローの足りない所を鍛えて行くんだ。一石二鳥だろ？」

トウガ

「ほう、じゃあこのダンジョンを選んだエトランゼさん、ここで何を鍛えるんだ？」

エトランゼ

「それはこのダンジョンの名前が出てくるまで分からないわ。でもそろそろ出てくるわよ。」

『すごい力が身に付くダンジョン』

トウガ

「なにこれ？（汗）」

斬新すぎるというか、大雑把すぎるというか……

エトランゼ

「いいじゃないの？こういうダンジョンなら実用的かつ物理的な力が手に入りそうだし。」

そういう力が手に入れば何でもいいのか？

ピロ彦

「とにかく、このダンジョンの任務は何なんだエトランゼ？」

エトランゼ

「待って、もう少しでターゲット情報が出るから。」

ん？ターゲット？誰か倒すのか？

エトランゼ

「その逆よ。ターゲットを救うのよ。」

トウガ

「救う？」

II
II
II
II
II
II
II
II
II
説明
II
II
II
II
II
II
II
II

地球と裏地球、この2つは互いに干渉しあっており、同じ人物が違う姿で存在している。しかし一方の人物が死ぬと、もう一方の人物が死しにそうになったりする。

[illegible]

エトランゼ

「それを回避させるようにするのが今回などの任務なのよ。」

トウガ

「なるほど。」

エトランゼ

「あ、ターゲット情報が来たわよ。」

なんでそうもそんな力を求めるんだ？そんなに弱いのか？現？マケレンノジャー？

トウガ

「まあとにかく、スバルを見つけないとなあ。」

そう言つて自分は歩きだす。・・・スバルがどこにいるいるのかも分からず。

ピロ彦

「そうだな。あ、そうだトウガ。」

トウガ

「ん？なんだ（カチッ）？」

あれ？今何か押し

ドスッ！！（地面から飛び出した針がトウガの右足に刺さった音）

トウガ

「ぎゃあああああ！！足が！足が思いっきり針に突き刺さって貫かれたー！！！！」

ピロ彦

「不意に動くと罠に掛かるから気を付けろー。」

トウガ

「早く言えー！！！！」（怒）

右足を抑えてのたうち回りながらピロ彦に怒鳴る。くそ！早くもダメージが入ったじゃないか！！

エトランゼ

「そう言うアンタも、ダンジョンなんだからそついうのくらい出てくるのに気付きなさいよ。」

トウガ

「……………あ。」

エトランゼ
「……………」

マケレンノジャー
「……………」

トウガ
「……………」

ピロ彦
「……………」

トウガ
「……………くそー！早く言えよピロ彦！！おかげでいきなりダメー
ジ入ったじゃないか！！」

エトランゼ・ピロ彦
「（言いなおした上に誤魔化した……………」

マケレンノジャー
「……………」（汗）

そんなやりとりをしていると・・・

ガサガサ

エトランゼ・ピロ彦・トウガ
「「ん？」」

マケレンノジャー
「・・・・・・？」

草陰から何か音が聞こえた。

トウガ

「何だ？もしかしてスバルか？」

エトランゼ

「いや、ここでいきなりターゲットと出くわすのはおかしいでしょ？」

ピロ彦

「そつだよな。やっぱりここはヒーロー的にお約束な敵キャラ登場
だろ？」

エトランゼ

「いやそれもないんじゃない」

「

戦闘員×約30人

『イーツ!!!』

うん、お約束だね。草陰から戦闘員達が飛び出してきた。

トウガ

「やれやれ、さっさと片付けようか。」《セイバー!》

右足の痛みを堪えながらメモリを取り出し起動させ、いつの間にか

付けたベルトに差し込む。そして、

トウガ

「変身!!」

《セイバー!!》

仮面ライダーセイバーへと変身する。

セイバー

「よし!!いくぞザコ共!!」

セイブレイダーを取り出して、戦闘員達に突っ込む。

カチッ!

「セイバー」

そんな音が聞こえた瞬間、自分は爆発によってぶっ飛んだ。てか今度は地雷かよー！ー！！？

[illegible]

???

「うゝん、どこ「コ」ゝ?」

私、スバル・ナカジマ。今私は迷っています。えーどうしてかというのは（理由はターゲット情報で出てますので省きます。）てな事がありまして、今はジャングルでお腹を空かしながら辺りを彷徨っています。

スバル

「うわゝん、一体どうなってるのゝ?」

愚痴りながらも歩く私。どこに行っているのかも分からず。・・・すると、

ガサガサ

草陰から音が聞こえた。

第4話「レベル？絶対勝利で負けんのじゃー！」中編その1（後書き）

中編その2へ続く。

丸太が飛んできて自分の横っ腹に直撃したり・・・

ガジッ！！

セイバー

「あだあ！！」

トラバサミに挟まれたり・・・

ズボッ！！！！

落とし穴に引っ掛かったりした。しかも落とし穴の方は高い崖のよ
うに底が見えなかった。

セイバー

「これ落とし穴ってレベルじゃないだろー！！？（汗）」

ヒロ彦

「どうやらこのダンジョンのボスマップみたいだな。」

セイバー

「えっ？おいおい、スバルを探してもないのにココに来て意味が無いぞ。」

エトランゼ

「・・・いや、そうでもなさそうよ。」

セイバー

「へ？」

???

「がおおおー！！！！」

どこから現れたのか分からずなのだが、いきなり大きな花の怪物（良く見ると下半身は顔？と同じ柄のパンツ着用）が、おおきな鳥かごのような檻を2つ持って飛び出してきた。って良く見たらこいつボスパクンじゃん、何でこの世界に・・・あー、こいつもオメガシヨッカーの一味か。

ピロ彦

「ん？・・・！！おい、アレを見る！！」

ピロ彦が何かに気づき、左手（？）の檻に指差す。何だってんだ？

スバル

「ひひひ、助けてひひひ！！（泣）」

見ると中にはスバルが閉じ込められていた。えへ、まさかアイツ（ボスパックン）を倒してスバルを救えと？

ピロ彦

「そうらしいな。よし、行け！マケレンノジャーと仮面ライダーセイバー！！」

セイバー

「・・・アンタは戦わないのか？さっきのザコ戦もそうだけど。」

ピロ彦

「無茶言つな！！俺はただの背後霊なんだぞ！！？」

まあ、分かっちゃいるんだけどさ。・・・・・・はあ。

セイバー

「まあいいか、行くぞ。」

マケレンノジャー

「……………。（コクッ）」

できれば返事してほしいんだが……………

|||||

セイブレイダーを構えながら突っ込み、ボスパックンに斬りかかる。

ボスパックン

「ぐわおお!!」

こっちに気づいたボスパックンは、檻を振り回しながらこっちに突っ込んでくる。

スバル

「あわわわわわわ!!?」

回されているので当然中のスバルも目を回す。

ボスパックン

「がああ!!」

それも気にせずボスパックンは、空の檻をこっちに振り落とす。
・
が、

セイバー

「でりゃあああ!!」 (ズガンッ!!)

自分はセイブレイダーで受けきる。だけどやっぱ重い!! 足元の地面も少し陥没している。

マケレンノジャー

「.....!!」 (ダンッ!)

でもその隙にマケレンノジャーが自分の後ろから跳び出し、

ドゴンッ！！！

ボスパックンの頭を殴り飛ばす。その攻撃によってボスパックンが少しふらつく。

ピロ彦

「よし！今の『マケぱんち』よかったぞ！！」

セイバー

「『マケぱんち』！！？ダサッ！！もうちょっといい名前つけよう！？例えば」

《セイバー！マキシマムドライブ！！》

セイバー

「デイメンションエッジ！！」（ズバン！！！！）

ボスパックンの右手(?)の方を切り裂いた。

セイバー

「・・・・・・みたいさ。」

．．．と思ったら切り裂かれていなかった．．．と思いきや、

キュウウウン……ズシャアアア！！！！

メモリを抜くと同時に、ボスパックンの右手が切れ裂かれた。

ピロ彦

「おお！凄いなー！！」

ピロ彦が感激しているがムシ。そろそろトドメ指さないと。

セイバー

「それじゃあ行くぞ、マケレンノジャー。」

マケレンノジャー

「……………」（コクッ）」

《セイバー！マキシマムドライブ！！》

さつきはセイブレイダーに差し込んだが、次はベルトの横のスロットに差し込む。

セイバー

「とう！！」（ダンッ！）

マケレンノジャー

「……………！」（ダンッ！）

次にマケレンノジャーと一緒に飛び上がり、ボスパックンに向けて蹴りだす！！

セイバー

「バスタードロップ！！！」

マケレンノジャー

「・・・・・・・・！」

ピロ彦

「放てー！！！！『マケきつく』ーーーー！！！！」

セイバー

「いやだからダサいって・・・」

それを言った直後、マケレンノジャーの蹴りは左手(?)の檻を壊してスバルを助け、自分の蹴りはボスパックンの頭に落とし、そのまま真っすぐ切り落とした。

ボスパックン

「ぎゃおおおおお！！！！？」（どがあああああん！！！！）

そしてボスパックンは雄叫びを上げて爆散し、自分は散ったボスパックンにこう告げる。

セイバー
「・・・チェックメイトだ。」

第4話「レベル？絶対勝利で負けんのじゃー！」中編その2（後書き）

後編へ続く。

第4話「レベル？絶対勝利で負けんのじゃー！」後編（前書き）

今回は短めです。

|||||||ヒーロー心得|||||||

ピロ彦「ヒーローとは何か！？それをこの俺、一文字ピロ彦が教えてやろうー！」

トウガ「・・・背後霊のお前が？」

ピロ彦「今回のテーマは、『愛』！！愛こそ俺達ヒーローにとって無限に与えてくれるエネルギーなのだ！！」

明久「まあ、そうだね。」

ピロ彦「ヒーロー心得！！『ヒーローは、愛があれば大丈夫！！』愛さえあればある日突然、『あなたとは友達でいたい。』とか言われても大丈夫！愛さえあればある日突然、着信拒否されようとも大丈夫！！愛さえあればある日突然、家財道具一式とともに彼女が消えても、愛のイリユージョンだと思えば大丈夫！！」

姫路「それ、全然愛されてませんよね？」

ピロ彦「愛される事が重要なのでは無い！！愛する事が重要なのだ！！」

ライ「いい言葉なのに、全然良く聞こえないのは何でだろ？（汗）」

ピロ彦「『愛があれば大丈夫!!』これを呪文のように繰り返すのだ!!そうすれば、そんな気になってくるさ!!!」

トウガ「それじゃタダの自己暗示だろ!どこがヒーロー心得!？」

ヒーロー心得 終わり

第4話「レベル？絶対勝利で負けんのじゃー！」後編

<トウガ視点>

スバルを救出し、ボスも倒して任務完了。裏地球のダンジョンを出て特訓施設へと戻って来た。

〓〓特訓完了〓〓

マケレンノジャーは、『マケきつく』を習得した。

梶原トウガは、『不幸体質』がUP^{アップ}した。

トウガ

「いらねー！！（汗）」

あの後ピロ彦達と別れて、スバルを連れてデンライナーの所へ帰って行った。

「へー、あたし達の世界や他の世界がそうなるうとしてるんだ。びっくり」。 (もぐもぐ) 「

トウガ

今度はスバルのこれまでの経歴を聞いてみる。

「なんか、変な空間の中にそびえ立つ大きな真つ黒いお城の牢屋。」

トウガ

「なるほど。他に閉じ込められた生徒は？知ってる奴だけでもいい。」

スバル

「えつと・・・ティアにヴィータさん、ニアと坂本さんと霧島さん、あさひとシモンとカミナさん、クルスとエリオとキャロ、……………ごめん、他にもいっぱいいたんだけどここまで。」

トウガ

「いやいい。さて、その後お前を含めた生徒達で脱出したって聞いているけど、さっき言った生徒で脱出した生徒は？」

スバル

「脱出したのは、クルスとあさひ以外の人達。」

トウガ

「そうか。……………なあ、このまま自分達は世界を回って他の生徒がいなか探しに行くんだが、お前もそれに入る事になるけど大丈夫か？」

スバル

「全然！むしろ入れさせて！！あたしもEクラスとティア以外のク

ラスの人達大好きだから助けたい!!」

トウガ

「……分かった。これからもよろしくな。」

スバル

「うん!」

こうしてスバルも仲間探しに加わった。

|| || || || || || || || || || || || || || || ||

ヤイバ

「よし、仲間が加わった所で、次の世界に行ってみよう!!!!」

ライ・明久・スバル

「「「おー!!!!」」」

姫路

「お、おー。」

サクラ

「あらあら。」

いつもテンション高いなあの人。姫路さんはちょっと緊張しながらも頑張ってる。にしても、大丈夫かな良太郎さん達。あのまま放ってここに来たし。

パアアアア！

そう考えてる間に次の世界が描かれる背景ロールが浮かび上がる。
現れた絵は……

ってくる。

???

「これを使え!!」

一人の男が3枚のなにかをもう一人の男に投げ渡す。3枚のなにかを受け取ると、男は腰に付けたベルトに入れ、横に付いてる物でなにかをスキャンし叫ぶ。

???

「変身!」(タカ!トラ!バッタ!タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ)

そして男は変身した。

『仮面ライダーオーズ』に。

第4話「レベル？絶対勝利で負けんのじゃー！」後編（後書き）

やっと終わった第4話。 それでは、次回予告。

次回、『仮面ライダー始めてみました。』は・・・

???「あれ？この自販機お金が使えない？」

???「いいね、君のその欲望。」

???「何でお前が!？」

???「変身!!！」

第5話「オネーサマとカードと携帯電話」

薙ぎ払え！正義の剣で恐怖と悪を!!！

第5話「オネーサマとカードと携帯電話」前編（前書き）

オーズの世界の時系列は、1000回記念終了後です。

第5話「オネーサマとカードと携帯電話」前編

<トウガ視点>

スバルと合流し、仲間探しを続ける自分達が次に来た世界へと到着した。

明久

「ココって……地球だね？」

ライ

「あー、明久兄ちゃんまだ前の世界の事引きずってる？」

瑞希

「まあ、確かにあれは驚きでしたけど……」

いきなり宇宙(?)というか、変わった世界にきたからなー。

スバル

「まあ、とりあえず自販機でジュース買って飲みながら他の生徒達を探そう。」

また入れてみるが、

カラン！

またお金が出てきた。

スバル

「あれ〜？この自販機お金がつかえない？壊れてるのかな〜？」

そんな事を呟くスバル。・・・・もしかして、

トウガ

「・・・・もしかしてアレか？」

「ごそごそ」

気がかりがある自分は、ズボンのポケットにしまっている物を取り出そうとする。

明久

「？なにやってんのトウガ。」

トウガ

「いや、もしかしたら別の何かをそれに入れるんじゃないかと。・・・あ、あった。」

そう言って自分は、ポケットから身の丈ほどの量の何かが入った袋を取り出す。

明久

「ちよつと！？その袋どう考えてもポケットに入らないよね！？どっから出てきたの！？ポケット凄！！」

トウガ

「これでよくひみつ道具を出します。」

明久

「どら もん!!?」

まあ、そんなやりとりも終わらせて、袋からそれを取り出す。それは、

スバル

「メダル?」

そう、取り出したのは銀一色のメダルだった。

明久

「トウガ、それどうしたの?」

トウガ

「アンパンマンの世界に現れた怪物を、倒した結果出てきた物だ。」

明久

「へー、……あ!じゃあココの世界って」

トウガ

L

L

11

2

•

???

「ああ、お姉さま・・・あなたは一体どこへ行ってしまったのでしょうか？美春はあなたの事を思うと、夜も眠れずにいます。ああ、会いたいですお姉さま。そしてあなたの体、唇、あなたすべてを美春の物に――！！！」

???

「いいね、君のその欲望。」

美春

「!？」

いきなりの声に驚きながらも、声がした方に振り向く女子『清水美春』。するとそこには、

メダルを持った、黒と黄色の服を着た銀髪の青年だった。

[illegible]

???

「タコ！タコ！」

?

「ウナギー！」

スバル

「うえーん、何でジューズじゃなくてロボットが出てくるのー？」

トウガ

「いや、これはそういう自販機だから。」

あまりにも喉が渴いていたスバルは、メダルで自販機の缶ジュース

を貰おうとしたが、出てくるのはこの世界のオーズのサポートメカ、『カンドロイド』だけだった。

スバル

「トウガ、後もう1枚メダルちょうだい。」

トウガ

「もう諦める。これにはジュースなんか一本も入っていないんだからさ。」

スバル

「おねがい……。」「泣」

ついには泣きつくスバル。しょーが無いなー。

トウガ

「これっきりだからな。」「（ピーン！）」

そうやって自分はメダルをスバルに投げ渡す。

スバル

「わーい！！ありがとー！！」

スバルはそれを受けとると、嬉しいのかピョンピョン跳ねまわる。

スバル

「よーし！これでラストー！！」

チャリン！（自販機にメダルを入れる音）

ポチ！（ボタンを押す音）

~~~~~  
~~~~~  
タカカン！！

[illegible]

「スバル」

「明久」

「瑞希」

「ライ
.
.
.
.
.
」

トウガ
「
.
.
.
.
.
」

????

「があああああ!!!」

爆発が起こった所に来てみると案の定、頭（具体的には両耳）につずつドリルが付いた猫の怪人が暴れ回っていた。

明久

「ちょ、どうするトウガ!?!」

トウガ

「おいおい、そんなの決まってるだろ?」

《セイバー!》

トウガ

「ぶっ飛ばす!変身!」 《セイバー!》

仮面ライダーセイバーに変身し、相手に突っ込む。

セイバー

「でいー!!」(ドゴー!!)

そして突っ込みながら相手を殴る。するとさっきのメダルが、相手の怪人から飛び散る。

セイバー

「(だけど、今はそれを気にする場合じゃないな。)(おりゃー!!」
(ダンー!!)

今度は蹴りを放つ。その攻撃で怪人は少し後ずさりし、雄叫びを上げる。

???

『オ、ネーザマ――――!!!!』

.....え？

トウガ

「え、もしかして・・・アイツ？」

明久

「?どうしたのトウガ?!」

トウガ

「あー、コイツもしかしたらうちの級友かも。」

明久

「え！？ホント！！？」

トウガ

「うん、しかも自分にとってもお前にとっても苦手な奴だ。」

明久

「え？」

トウガ

「清水美春だよ、こいつ。」

第5話「オネーサマとカードと携帯電話」前編（後書き）

中編へ続く！！

第5話「オネーサマとカードと携帯電話」中編その1（前書き）

『仮面ライダー始めてみました。』！！前回の三つの出来事は、

一つ！トウガ達がオーズの世界にやって来た！！

二つ！スバルが自販機でタカカンを大当たりさせる！！

三つ！トウガ達がヤミーと接触。そのヤミーはトウガの級友清水美春だった！？

第5話「オネーサマとカードと携帯電話」中編その1

<トウガ視点>

明久

「ええ！？清水さんって、確かトウガと同じDクラスの」

セイバー

「ああ、お前もよく追われてた美波大好き娘の清水美春だ。」

まさかこんな形で会うとは・・・

清水ヤミー(?)

「オネーサマー……!!」

ヤミーがそう叫ぶと、自分に向かって走り出す。突進か！？ええい、ひとまずここは防御！セイブレイダーで防御の構えをとる。……
・が、

スツ（セイバーの横を通り過ぎる音）

自分に構う事無く、清水ヤミー（？）は自分を無視して通り過ぎ、向かった先は……

瑞希

「え？ええ！？」

明久

「え！？姫路さんに！？」

セイバー

「なに!?!」

自分の後ろにいた姫路さんに突っ込む。おいおい、一体何が目的だ!?! って今はそんな事はいいい、このままじゃ姫路さんに危害が及ぶ! ヤミーを止めようと自分も走り出すが相手が早く追いつかない! 明久達も姫路さんを救う為に走るが間に合わない!!

清水ヤミー(?)

「オネーサマー!?!?!」

瑞希

「きゃああああ!?!」

明久

「姫路さん!?!」

そしてヤミーはそのまま姫路さんに襲いかかり、

タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ

???

「ハアッ！！」（ズバ！！）

清水ヤミ（？）

「ギアアアアア！！」

仮面ライダーオーズによって、横っ腹をメダジャリバーで切り裂かれた。

オーズ

「さあ、今のうちに逃げて!!」

瑞希

「・・・っは! えっ、あ、はい!」

いきなりの登場にビックリした姫路さんだが、すぐに我に返りその場を離れて明久の所へ寄る。

セイバー

「ありがとう、自分の学友を助けてくれて。」

戦闘中ではあるが、一応オーズに礼をする自分。

オーズ

「気にしないで、人助けはいつもの事だから。それに今は・・・」

「

セイバー

「ええ、やるべき事をやっちゃいましょ。」

そう言っで自分とオーズは、さっきのダメージを喰らいながらも立ち上がるヤミーに目をやる。

オーズ

「アंक！このヤミー猫に近いからカザリのヤミーだー！」

そのヤミーを見て、後ろの男『アंक』にそう告げる。てかいつのまに？

アंक

「それぐらい俺でも分かる！だから何だ！？」

オーズ

「中に人がいるかも知れない！助けるからチーター以外にそれができそうなメダルは！？」

アंक

「これで何とかしろ！無くすなよー！」（ブンッー！）

そう言つてアंकは、赤いメダルをオーズに投げ渡す。それをキャッチしたオーズは、すぐさま『オーカテドラル』の（自分から見て）右側に入っている緑のメダルを取り出し、代わりにさっきの赤いメダルを入れて『オースキャナー』でスキャンする。

タカ！トラ！コンドル！

そしてオーズは、亜種コンボ『タカトラドル』に変身する。

オーズ

「ハアアアアア！！」（ズバ！ズバ！ズバ！）

そのままオーズはヤミーに突っ込み、トラアームの『トラクロー』とコンドルレッグの『ラプタードエッジ』を展開させて相手を斬りつける。

オーズ

「おおおおお！！！！」（ズバズバズバズバ！！）

斬り続けていくと、切り傷から大量のメダルの中に人の手がうつす
ら見えた。もしかして……

オーズ

「君、今のうちに!!」

セイバー

「……っ! おおおお!!」 (ガシィ!!)

オーズに言われてすぐさま切り傷の中の手を掴む。そして、

セイバー

「おりゃああああああああ!!!!!!」

ずりゅりゅっっっ！！！

思いっきり引っ張り上げると清水美春が出てきた。やっぱりコイツだったか。

セイバー

「スバル！こいつを頼む！！」

スバル

「あ、うん！」

気絶しているので、スバルに清水美春を預ける。よし！残るはヤミ―を倒すだけだ！！

ぱちぱちぱち！

セイバー・オーズ

「「???」」

そう思った瞬間、どこからともなく拍手が聞こえる。何だ？

????

「うん、オーズとバーズ以外の仮面ライダー。案外やるね。」

そう言って自分達とヤミィの間に現れたのは……

アंक

「・・・・・・・・カザリ。」

グリードの一人、カザリであつた。

カザリ

「やあアंक。」

アंक

「お前の挨拶なんかいらねえ。何しに来た？」

カザリ

「ああ、今日はコアメダルの為に来たんじゃないんだ。」

アंक

「なに？」

カザリ

「今日僕の用事は・・・・・・・・」

そう言いながらカザリは、自分に指差しこう告げた。

カザリ

「君だよ。仮面ライダーセイバー。」

セイバー

「自分に用？」

カザリ

「そう、君はいつかはオメガショッカーの大きな災いになるからね。今のうちに種は潰しておかないとなんだ。」

オメガショッカー・・・こいつもその一員か。

セイバー

「もしかして、ここでお前が自分を倒すのかい？」

カザリ

「いや、僕じゃなく別の人が君の相手さ。」（パチン！）

カザリが指を鳴らした瞬間、銀色のカーテンが現れ、そこから人が現れる。

セイバー

「！？」

明久・ライ・瑞希

「「「え！？」「」」

スバル

「うそ！？」

ここにいる聖王学園の生徒が驚愕する。なぜなら現れた人物は・・・

聖王学園Fクラス代表、『坂本雄二』だったのだから。

明久

「雄二!？」

セイバー

「何でお前が!？」

雄二

「・・・・・・・・」

自分と明久が問いかけるが、雄二は無言のままだった。そして、

雄二

「うおおおおおおお！！！」

雄二が雄叫びを上げると共に、身体がマグマのような仮面ライダー、『アギト：バーニングフォーム』へと変身した。……っていうかいきなり最強形態！？きつつ！！

アギト

「がああああ！！」（ブン！！）

セイバー

「おわあ！？」

そしていきなり殴りつけてくる雄二。あつぶな！もうちょっとでモ口に喰らう所だった！！

カザリ

「ははは、頑張れ頑張れ。どっちが先に倒れるかな？」

ちきしょう！！カザリのヤツすっごいムカつく！！こつなりゃ・・・

《セイバー！マキシマムドライブ！！》

ベルトのマキシマムスロットにメモリを入れて、

セイバー

「ダガーストライク！！」

カザリを殴りつける！！！！

カザリ

「おっと。」（チッ！）

セイバー

「？」

カザリへのパンチはかすった程度だったが、その時に何かが落ちた。それをすぐさま拾って見る。

セイバー

「・・・・・・・・カード？」

そう、拾ったのは何かがうつすらと描かれた一枚のカード。良く見るとこのカードって・・・・・・・・

カザリ

「そのカードをじっくり見ていいのかな？」

セイバー

「!？」

カザリの声に気づいた時には、自分の目の前に雄二の拳が目映っていた。

第5話「オネーサマとカードと携帯電話」中編その1（後書き）

中編その2へ続く。

第5話「オネーサマとカードと携帯電話」中編その2

<トウガ視点>

．．．．．あれ？目の前が真っ暗だ。どうしてこんな所に？

え〜っと、確かカザリを殴ろうとしたけど掠っただけで、そこからカードが出てきてそれを拾って．．．．．あー、その後雄二の拳が目の前にあったという事は、やられたか自分。

．．．．．って待て、もしかしてココ死後の世界！？オーズの世界で自分終了のお知らせ！？

『．．．．．！』

『．．．．．！』

ん？声？誰だ？

聞こえそうな声を耳を傾けて聞きたろうとするが、徐々に意識が薄れていき、ついには意識がブラックアウトした。

II

明久

「あ、トウガ！大丈夫！？」

目が覚めると、知らない天井……というお約束ではなく、目の前には見覚えのあるバカ面の悪友の顔だった。

明久

「今なんか失礼な事考えなかった？」

トウガ

「気のせいだろ。それよりココはイタタタタタ!!?」

どこ？　って言いかけたがいきなり鼻に激痛が！！　もしや雄二の拳のダメージか！？

明久

「ああ！大丈夫！？」

トウガ

「大丈夫な訳がない!!!」

とりあえず、鼻の激痛が治まるのに10分も掛かった。

[illegible]

鼻の痛みも治まり、改めてココはどこか明久に尋ねる。

明久

「ココはクスクシエ。トウガがやられた後、オーズ・・・火野映司さんがコンボでなんとかその場を凌いでココへ来たんだ。」

トウガ

「そうか。清水美春の方は？」

明久

「ああ、清水さんは別室でまだ眠ってるよ。」

トウガ

「そうか。」

明久

「・・・・・・・・ねえトウガ。雄二一体どうしたんだろ？」

説明が一通り終わると、明久がそう言う。

トウガ

「・・・・・・・・さあな。少なくとも、今の雄二はオメガシヨッカーの一員と言う事は確かだ。」

明久
「・・・・・・・・。」

トウガ
「でも、雄二が敵に操られているなら、目を覚ます事をすればいいだけさ。」

明久
「・・・・・・・・そうだね。」

トウガ
「おう・・・・・・・・あ、そうだ。あれはどうなった？」

明久
「あれ？」

「あれ？とは一体なんなのか分からず、明久は首を傾げる。

トウガ
「自分が拾ったカードだ。カザリから取った。」

明久

「ああ、あれ！今僕が持つてるよ。」

そう言って明久が、ポケットの中から一枚のカードを取り出す。

明久

「でもこれって・・・」

トウガ

「ああ。間違いなくそれは、良太郎さん達が探している仮面ライダーのカードだ。」

まさかココで一枚見つかるとは。

トウガ

「まあとりあえずそのカード、暫くお前が持つとけ。」

明久

「え？僕が？」

トウガ

「ああ。もしかしたらもしかするかもだから。」

明久

「?・・・・・・・・ん、分かった。」

自分が何を言ってるのか分からずの明久だが、明久は一応納得してカードをポケットにしまう。

瑞希

「あ、梶原君。目が覚めたんですね?」

それと同時に、姫路さんが鍋を持って入って来た。

トウガ

「おう。ところで、その鍋は?」

瑞希

「お粥です。もうお昼ですから明久君と梶原君にと思って。」

そう言つて姫路さんは、鍋のフタを取つて中身のお粥を見せる。うん、いい出来だ。いい出来なんだけど……

トウガ

「……………」

何だろう、自分のナニかが『ニゲロ』と叫んでいる。前にもこんな事あつたような……

明久

「……………っ！（ガタガタガタ！）」

しかも隣にいる明久は、もの凄く震えている。

瑞希

「さあ、どうぞ。」

そんな自分達を気にせず、姫路さんがそう言つて自分の前に鍋を置く。

トウガ

「（どうする自分、ナニかが叫びっぱなしだけどこのまま放って置く訳にもいかないし……）」

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・

・
・
・

仕方が無い、頂くか。まあ、まずくてもニアちゃんの料理で耐性が付いてるし、何とかなるだろう。

トウガ

「いただきます。」

瑞希

「はい。召し上がって下さい。」

明久

「ちよっ！？トウガ駄目だー！！！！！」

パクッ！！

トウガ

「………うん、とってもおいしいでグバハアア！！
」

明久

「トウガーーーー！！！！（泣）」

ニアちゃん以上の超絶的な味を体感し、自分の意識が再びブラックアウトした。

|| || || || || || || || || ||
 < 明久視点 > || || || || || || || ||

トウガが姫路さんの手料理兵器でダウンした後、アंकさんがヤマの気配を感じ、映司さんと一緒にクスクシエから飛び出していった。

瑞希

「大丈夫でしょうか、火野さんとアंकさん……」

比奈

「大丈夫。映司君達とても強いから。」

クスクシエのバイト人「泉比奈」さんが、心配する姫路さんを宥める。

知世子

「それにしてもごめんね、お店の手伝い付き合わせちゃって。」

クスクシエの店長『白石 知世子』さんが手伝っている僕達に軽く謝る。

スバル

「大丈夫です！なにもしないでいるよりはマシですから。」

ライ

「知世子さ〜ん！コレここでいいですか〜？」

しかし、みんなそんなこと気にせずせつせと働く。うん、いい光景だ。

瑞希

「それじゃあ私、今度はお夕飯も作っちゃいますね。」

明久

「いや姫路さん、それは僕がやるよ。」

これ以上死者を出す訳にはいかない。そう思った瞬間

ドガアアアアン!!

店の入り口をぶっ壊して、そこから現れたのは

清水ヤミー

「オ、ネーザマ、――!!!!」

さっきの清水さんヤミーだった。っていうかなんでここに!?

清水ヤミー

「シャ――!!!!」

こっちの驚きにも構わずまた姫路さんに襲いかかる。……が、

明久

「そうはさせない――!!!!」(どかつ!!!)

清水ヤミィ

「ニヤ！？」

清水さんヤミィの横からおもいつきりタツクルをかます。

清水ヤミィ

「シャーーーーー！！！！（怒）」

あまり効かなかったけど邪魔したおかげか、今度はこっちに襲いかかる。でも好都合！！

清水ヤミィ

「ニヤーーーー！！！！」

清水さんヤミィが爪で僕に振り下ろす。・・・・・・が、

明久

「よつとー！！」（ブンッ！！）

清水ヤミ

「ミヤ？」

それを難無く避け切る僕。ふふん、これくらい鉄人（西村先生）との追いかけてで身に付けた反射神経で避けれるさ。

清水ヤミ

[illegible]

今度は連続パンチ！？

明久

「うわっ とととととととととと!!」
（スカカカカカカカカカカカ！）

ひい！今はさすがに危なかった！！

明久

「みんな！今のうちに逃げて！！」

清水さんやミーが僕に向いてるうちに他のみんなにそう言い放つ。

瑞希

「そんな！明久君を置いて逃げるなんてできません！！」

明久

「お願い！急いで「シャー——！！」っ！！？」

瑞希

「明久君！！」

しまった！これは直撃間違いなしだ！もしかしてこれ僕死んだ？

明久

「（…………いや、まだ死ねない！！）」

僕がそう思った瞬間、ポケットの中のカードが光り出した。

「……………………ライ視点……………………」

うお！？明久の兄ちゃんの持ってたカードが光り出した！！

明久

「……………………え？あれ？これって……………」

そして光が収まった頃には、明久の兄ちゃんの腰にはベルトを着けて、右手には携帯電話を持っていた。

明久

「・・・・・・・・よし！」

ちよつと啞然としてけど、我にかえった明久の兄ちゃんが携帯電話を開いて使い始める。

《5・5・5！S t a n d i n g - b y ！》

携帯電話からそんな電子音声が聞こえると、明久の兄ちゃんが携帯電話を閉じてそろそろを右手で持ちながら、大きく上げて、

明久

「変身！！！」《Complete!》

携帯電話をベルトに装着。そして明久の兄ちゃんが赤い光に包まれて、光がまた収まった時には……

ファイズ（明久）

「よし、行くぞー！！」

を現したような顔の仮面ライダー、『ファイズ』に変身した明久の兄ちゃんだった。

第5話「オネーサマとカードと携帯電話」中編その2（後書き）

明久、変身！！後編へ続く。

第5話「オネーサマとカードと携帯電話」後編（前書き）

前作のオリキャラ設定を、大幅に改変しました。よかったら見てつて下さい。

第5話「オネーサマとカードと携帯電話」後編

<明久視点>

えーっと・・・いきなりな展開で、今の僕じゃ何が起こったかあんまり分からない。

清水ヤミー

「シャーーーーー！！！」

・・・でも、ひとつだけ分かる事がある。

ファイズ（明久）

「せい！ー！」（ドゴー！）

清水や三ー

「二」ヤ！！？」

今の僕は、仮面ライダーになったという事に。

[illegible]

清水さんやミーを外へふっ飛ばし、今は外の公園で清水さんやミーと攻防を繰り返している。

ファイズ

「えい！やあ！たあ！」
(ドン！ドン！ドン！)

清水ヤミー

「グウウウウウウ・・・」

のだが、一方的に僕の方が勝っている。よし！このまま押し切れ僕
！！！！

清水ヤミー

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

ファイズ

「ぐううう！？」

突如、清水さんヤミーが雄叫びを上げたと同時に、オーラみたいな
ものによって吹き飛ばされる僕。

『何だ！？』と思って体勢を立て直すと、清水さんヤミーがだんだん大きくなって、ライオンみたいな怪物に変身した。もしかして欲望が膨れ上がった！？

清水ヤミー

「ガアアアアアアアアア！！！」（ブン！！！）

ファイズ

「うわぁぁぁぁぁ！！！」（ズドガアアアアン！！！！）

清水さんヤミーが僕に向けて腕を振り落とし、それを何とかギリギリで避ける。危な！あんな喰らったら一撃死だよ！！

清水ヤミー

「ゴアアアアアアアアア！！！」（ブン！！！！）

そしてまた僕に向かって腕を振り落とす清水さんヤミー。ていうかこれはさすがに避け切れない！！今度こそ僕死んだ！！？

《セルバースト!!》

ドカアアアアン!!!

清水ヤミー

「ギャアアアアア!!!」

そう思った瞬間、そんな音声が聞こえたと同時に、清水さんヤミーになにかが直撃した。

????

「おい、大丈夫か? そのオーズじゃない仮面ライダー。」

ファイズ

「???」

声がした方に振り向くと、そこにいたのは

バース（伊達 明）

「それじゃあ後藤ちゃん、支援よろしく！」

後藤

「はい。」

仮面ライダー『バース』に変身した『伊達 明』さんと、後ろで支援する『後藤 慎太郎』さんだった。

バース

「そっちの仮面ライダーさんよ、まだイケるか？」

ファイズ

「え・・・あ、はい！大丈夫です！！」

二人を見てボーっとしていたけど、再び声を掛けられて我に返り、また体勢を立て直す。

バース

「おつ、他の奴らも来たか。」

え？他の？もしかして相手の増援？

映司

「すみません伊達さん！他のヤミの相手をしてたのでつい。」

アंक

「随分大きくなったな。こいつは期待大か？」

映司さんとアंकさん！！相手のじゃなくこっちの増援か。

???

「映司さん達だけじゃないぞ。」

ファイズ

「!!!!!!」

また声のした方に振り向くと

トウガ

「おう、待たせたな。」

僕の悪友、梶原トウガだった。

ファイズ

「トウガ！！大丈夫！？色んな意味で！！」

トウガ

「まあね。それよりもさっさとアイツを倒すとして。」《セイバ
ー！》

そう言ってトウガが、ベルトを付けてメモリを起動させる。

アंक

「映司、これで仕留める。」（ブンッ！）

映司

「（パシッ）分かった。」

映司さんも、メダルを受けとり、ベルトを装着する。そして

トウガ

「変身！！」《セイバー！》

映司

「変身！！」《タカ！クジャク！コンドル！タ〜ジャ〜ドル〜
〜》

トウガはセイバーに、映司さんはオーズのコンボ形態『タジャドル
コンボ』に変身した。

〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓トウガ視点>〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓

よし、ライダーが4人集まった事だし

セイバー

「行きましようか！！」

ファイズ・オーズ・バース
「「「おお!!」」」

うわお、まさかノッてくれるとは、もしかして明久以外の人達もバカ?

ファイズ・オーズ・バース
「「「失礼な。」」」

人の心にツツコミかますな。てか息までぴったりだな。

じゃあ改めまして、

セイバー
「行きますよか!!」

ファイズ・オーズ・バース
「「「おお!!」」」

自分がセイブレイダーを取り出し、明久がファイズ専用武器『ファイズエッジ』を取り出す（どこから取り出したかは不明だが）。そしてそれを構えながら敵に突っ込む。

清水ヤミー

「ガアアアアアア！！！」

清水ヤミーが三度目の腕の振り落としをしますが、それを気にせず突っ込む。なぜなら

オーズ

「はぁぁぁぁぁ！！！」（ドン！ドン！ドン！）

バース

「おおおおお！！！」（ドン！ドン！ドン！）

オーズがタジャスピナーで火炎弾を放ち、バースはバースバスターでエネルギー弾を放つ。

清水ヤミー

「グウウウウウ！！！？」

オーズ達の攻撃で、清水ヤミーが怯む。その隙に自分と明久は・・・

ファイズ

「えい！！」（ズシュ！！）

セイバー

「おりゃー！！」（ザシュ！！）

相手の胴体に剣を刺し

ファイズ・セイバー

「「おうりゃああああああああ」（ズバババババババ！！！！）

そのまま握っている柄を押し出すように前に走り出し、胴体から離れそうなところで思いつき

ズバァアアアアアアアン!!!!!!!!!!

横へ振る。そして斬り口からメダルがジャラジャラ出てくる。さてここまで来たら後はトドメだ。

《セイバー！マキシマムドライブ！！》

自分がベルトに差し込んだメモリを横のスロットに差し込む。

その横では、明久が右足に『ファイズポインター』を付ける。

《スキヤニングチャージ！！》

《セルバースト！！セルバースト！！セルバースト！！セルバースト！！セルバースト！！》

よく見ると、オーズはベルトを『オースキャナー』でスキャンし、
バースはいつの間にか『ブレストキャノン』を装着して、せっせと
ベルトにたくさんのメダルを投入する。どうやら全員必殺技の体勢
のようだ。

セイバー

「よっしゃ決めますか。」

ハッ! !」 (ダン! !)

ファイズ

「とう! !」 (ダン! !)

オーズ

「ハッ! !」 (ダン! !)

まずはバース以外のライダーが飛び上がり、バースは発射体勢に入
る。そして

セイバー

「おりゃああああああ! ! ! !」

ファイズ

「でやあああああああ！！！！」

オーズ

「せいやあああああああ！！！！」

自分が『バスタードロップ』、明久が『クリムゾンスマッシュ』、オーズが『プロミネンスドロップ』を敵に当て

バース

「おりゃあああああああ！！！！」（ズドオオオオオオオオオオオオオオ！！！！）

バースが『ブレストキャノンシュート』を放ち、敵に当てる。そして自分達の攻撃に耐えられなかった清水ヤミーは……………

なった。

そして他の事は映司さん達に任せて、デンライナーにもどる事にした。

ヤイバ

「さて、それじゃあ次の世界へレッツらGO!-!」

トウガ

「・・・・・・やけにテンション高いな兄者。（汗）」

サクラ

「出番が無い分、ここで燃焼させようとしてるらしいです。」

トウガ

「姉さん、その発言アウト。」

美春

「全く、こんな人達とお姉さまを探しに行くなんて。……憂鬱ですね。」

瑞希

「あはは（汗）」

スバル

「そ、それじゃあ次行こう、次！」

ライ

「オッケー！！僕が捲るよ！！」

明久

「次はどこだろう？」

パァ
パァ
パァ
パァ
パァ！

||
||
||
||
||
||
||
||
|| 次の世界 ||
||
||
||
||
||
||
||
||
||

そこは、
死神が集う場所。

そこは、
悪魔が集う場所。

そこは、
魔王が集う場所。

そしてそこは・・・吸血鬼が潜む場所。

第5話「オネーサマとカードと携帯電話」後編（後書き）

次回、『仮面ライダー始めてみました。』は……

???「きゃああああ!!」

???「ぎゃああああ!!」

???「ぐわああああ!!」

???「よう、トウガ達じゃねえか。」

第6話、『赤い月が染まりし牙』

薙ぎ払え！正義の剣で恐怖と悪を！！

第6話「赤い月が染まりし牙」前編（前書き）

今回はやや短めです。

第6話「赤い月が染まりし牙」前編

<トウガ視点>

??.?

「ぐわあああああああ!?!」

瑞希

「きゃあああああああああ！！！」

明久

「ぎゃあああああああああ！！！」

スバル

「ちょ、姫路さん！？吉井さんが死んじゃいますから落ち着いて下さい！！（汗）」

ヤイバ

「姫路、もつと力を入れないと吉井の首は曲がらないぞ。」

トウガ

「煽るなバカ兄者。」

清水美春と合流し、次の世界にやって来た自分達。……なのだが、

???

「ぎゃおおおおおおおん!!」

???

「がおおおおおおお!!」

???

「きしゃあああああ!!」

???

「・・・・あ~~~~~」

入り口のドアを開けた瞬間、キメラ、ドラゴン、大きな蛾、腐敗臭漂うゾンビが、乱闘をしていた。

もちろんそれにより

吹き飛ぶ肉体・・・飛び散る内臓・・・エアの如く噴き出す鮮血・・・。そんな惨状により姫路さんが恐がり、明久に抱きついた。

もとい、恐怖のあまりに姫路さんは明久の首を締めあげていた。（そして今にいたる。）

I

それからしばらく、何とか姫路さんを落ち着かせてデンライナーに待機させた。このまま一緒に行動したら明久の命がいくつあっても足りなくなる。

そして残った奴らでメンバーを編成し（自分、明久、スバル、兄者ことヤイバ）、搜索を開始した。

搜索を始めて数十分後、赤い月が照らす禍々しい大地を歩いていると、血のように赤い湖の横にそびえ立つ大きな城を発見した。

ヤイバ・トウガ

「うおおお・・・」

明久・スバル

「すっごーい。」

その城に入ろうと近くまで歩くと、その城の大きさに驚く皆。

スバル

「中に誰か住んでるかな？」

ヤイバ

「さあな。だがこの城に住んでるなら、それ相当のお偉いさんがいそうだな。」

トウガ

「じゃ、確かめる為に入ってみるか。明久、そっちの右側の扉を頼む。こっちは左側を開けるから。」

明久

「OK、分かったよ。」

そう言つて明久は、右側の扉を押し出す。そして自分是对になる、左側の扉を押し出す。

ギギイイイ…………

すると扉は、無情にも簡単に開いた。

ブオオオン！！！！

それと同時に、鉄球（自分の2倍の大きさ）が飛んできた。

ヤイバ

「総員回避——！！！！」（汗）

兄者の指令ですかさず横にジャンプ！！

ドガアアアアアン！！！！

そして鉄球は、誰にも当たらずそこらへんの岩に激突した。

あつぶなぐ、もう少し遅かったら直撃だった。

明久

「い、今のって？」

トウガ

「・・・・・・・・」

気になり扉の端から中をのぞいてみる。

？？？

「うおおおおおおお！！！！」

？？？

「ぎゃおおおおおおお！！！！」

するとそこには、大きな怪物と戦う赤い髪的青年と

キバ

「おおおおおおおおお!!!!」

吸血鬼のような仮面ライダー、『キバ』の姿があった。

第6話「赤い月が染まりし牙」前編（後書き）

次回、キバの正体が明らかに。お楽しみに！！

第6話「赤い月が染まりし牙」中編その1（前書き）

店が次の木曜日までの夏休みを始めたので、出来る限り多く投稿しようと思います。

第6話「赤い月が染まりし牙」中編その1

<赤い髪青年視点>

???

「があああああああ!!」

怪物が俺に向かって殴りかかってくる。

???

「フッ!!」(ダンッ!!)

ドゴオオオオン!!!

だけど俺はそれを難無く避ける。

???

「おおおおおお!!」(ズドン!!)

すると怪物の横から、
「キバ」が奴を蹴りつける。

そのおかげで怪物がよろめいて隙ができた。よい、喰らえ！……

???

「烈火武神擊！！！」

[illegible]

俺は奴に炎を纏った拳で連撃を叩き込む。

???

[illegible]

そして奴は俺の攻撃に耐えきれず、爆散した。

キバ

「やっ たな アデル！！」

アデル

「ああ。」

怪物を倒し、戦闘態勢を解いてキバがこっちに来る。

キバ

「いやー、今回も楽勝だったな……ん？」

途中でキバが言葉を止めてある方向に視線を向ける。なんだ？

気になって俺もその方向に視線を向けると、扉の端で覗いている奴らが4人いた。

するとキバは、その4人を見た瞬間こう言いだした。

キバ

「よう！トウガ達じゃねえか！！」

そう言ってキバは今の姿を解除して、素顔をみせ「

コー
タ
「よ。」

トウガ
「なんだ、コー
タか。」

コータ

「リアクション薄いなおい！！一万年ぶりだったのにそりやないだろ！？」

トウガ

「悪い悪い、まあお前らが攫われて約二、三日前だからそれくらいぶりだな。」

明久

「数えてたんだトウガ。」

スバル

「凄いねトウガ。」

トウガ

「当たり前だ、お前らと違ってそこまでバカじゃないんだから。」

明久・スバル

「「酷っ！！（汗）」」

明久達とそんなコントもどきをやっていると、コータが再び言いだした。

コータ

「いや、マジで一万年ぶりなんだよ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？

コータ

「いや、俺一度死んでんだよ。」

・・・・・・・・・・あ、そうなんだ。そんなコータの肩に手を置いてこう――

の後元の世界に戻る方法も解らず彷徨い続けていた。

そしてついに飢え死に仕掛けた時、赤い髪 of 青年『アデル』に助けられ、しばらくアデルの家にお世話になる事となった。

コータ

「で、この前これを拾ったら仮面ライダーになれるようになって、恩返しにこいつの手伝いをしようと思って。」

トウガ

「手伝い？」

コータ

「魔王ゼノンの召喚する為の材料集め。」

明久

「今さらつとんでもない事いったよね!？」

スバル

「何でそんな物を集めてるの？」

コータ

「いやな、アデルの家族がその魔王ゼノンのおかげで半分悪魔にされちまって、その魔王を倒せば元の人間に戻る方法があるかもっ

アデル

「そうか、ありがとうな。」

トウガ

「おう、どういたしましてアデルさん。」

ガツチリと握手しながらお互い礼をし、そして自分達の方法集めが始まった。

第6話「赤い月が染まりし牙」中編その1（後書き）

中編その2へ続く。

第6話「赤い月が染まりし牙」中編その2

<トウガ視点>

アデルさんとの握手を終えて、魔王召喚の材料集めを開始して約30分。自分達は城の上にある材料『シユラの剣』を取りに行く為階段を上ってた。……のだが、

セイバー

「ふう。」

セイバーのまま一旦階段に腰掛けて休憩をしていた。なぜかって？
上る途中から色んな怪物たちが襲いかかって来たのだ。

ファイズ

「それにしても凄い数だね。」

明久もファイズに変身したまま倒した怪物の山を見ながらそう呟く。

スバル

「ていうか、トウガ達も凄いな。あんな怪物たちをほぼ一撃で倒すんだもん。」

コータ

「全く全く。」

セイバー

「いや、お前は何で変身してねーんだよ？戦えよ。」

スバルの横で同意の意見を上げるコータに突っ込む自分。お前だつてキバに変身できるだろ。

コータ

「いや、俺はお前らが来る前から今まで戦ってたから休もうと。」

セイバー

「言っとくけどな、自分はココに来るまでずっと戦ってきたからな。」

コータ

「そんなの知りましえ〜ん、いいから休ませろ〜。」

セイバー

「それはこっちのセリフだ変態野郎。」

ファイズ

「ちょ、ちよつと二人とも。（汗）」

自分とコータがぶつかりそうな所で、明久が止めに入る。

「……待てよ？」

セイバー

「そう言えば、明久がファイズになったのはこっちに来る前の世界でだったな。」

コータ

「それがどうs
」

どうした？と言いかけたところで言葉を止めるコータ。どうやら分かったみたいだな。

ファイズ

「え？え？どうしたのコータ？というか何で僕を見つめるの？トウガもだけど。」

そして視線を明久に向けて言う。

セイバー・コータ

「明久。」

ファイズ

「？」

セイバー・コータ

「お前はライダーになりたてだからこっからはお前が戦え。こっちは休むから。」

ファイズ

「酷い！て言うかトウガはアデルさんの手伝いするって言ったからちゃんとやりなよ！！」

アデル

「おい、そろそろ行くぞ。」

ヤイバ

「シユラの剣が。どんなだろうな。」

・
そんなやりとりを見ていたアデルは、呆れながらトウガ達を呼び・

ヤイバはシユラの剣がどんな物かワクワクしていた。

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

それから今度は1時間と45分。ついに屋上へとやって来た。

明久

「うわ、高い。」

スバル

「下手して落ちたらひとたまりもないですね。」

そう言いながら、一旦変身を解いた明久とスバルは下を眺めていた。

トウガ

「さて、お目当てのシュラの剣は？」

そして他の皆はシュラの剣はどこにあるか探していた。

コータ

「あ、アレだ！」

そう言ってコータは、部屋の真ん中に刺さっている禍々しい剣に指差す。どうやらそれがシュラの剣らしい。

ヤイバ

「おお！カッコいいなあー！」

好奇心たつぷりの兄者が、シュラの剣を触ろうと近づいていく。

その瞬間、

ズドオオオオオオオオオオ！！！

???

「ガオオオオオオオオオオ！！！」

ヤイバ

「うおおおおお！！？」

兄者の目の前にトラ、若しくはライオンのような怪物が降って来た。
てか今度はアラガミのヴァジュラ！？オメガシヨッカー何でもあり
だな！？

トウガ

「兄者逃げろー！！」

すぐさま兄者にそう伝えるが、兄者が中々動かない。ちきしょう！
兄者の奴ビビってやがる！！

ヴァジュラ

「ガアアアアアアアアアア！！！」

ヤイバ

「ぎゃああああああああ！！！！！」

そしてついにヴァジュラが兄者に襲いかかった。

アデル

「飛翔爆炎脚！！！！！」

だが、アデルさんの攻撃で何とか免れた。

アデル

「早く逃げる!!」

ヤイバ

「す、すまねえ!! 助かった!!」

そしてアデルさんの言葉で、兄者は一目散に逃げ出す。

トウガ

「よし! 明久、コータ行くぞ!!」 《セイバー!》

明久

「うん!!」 《5・5・5! Standing-by!》

コータ

「おうよ! 行くぞキバット!!」

キバット

「OK! キバって行くぜ!!」 (ガブツ!!)

それぞれ皆、変身の用意を済ませて

トウガ・明久・コータ

「『変身！』！』！』！』 《セイバー！》 《Complete！》

仮面ライダーへと変身する。よし、ライオン（？）狩りの始まりだ
！！！！

！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

・・・ちきしょう！手強い！そして速い！！4人掛かりなのに
中々相手に攻撃を当てられない。相手が早すぎる。

ファイズ

「ていうかアデルさん、生身なのによくあんな怪物と戦えるね。」

セイバー

「・・・・・・・・人間やめてるな。」

ヴァジユラと戦っているアデルさんを見ながら、そう呟く自分達。

キバ

「喋ってるヒマがあるならアイツを何とかしろよ!？」

ファイズ

「いやいやいや、相手が速いんじゃないでしょうか」

セイバー

「ファイズアクセル使えないか？」

ファイズ

「え?・・・・・・・・あ、ある。使えそう。」

キバ

「早よ使えー!!!」

うつかりな明久にツッコむコータ。

そして言われて慌てながら明久は、ファイズアクセルのメモリーをベルトのファイズフォンに差し込む。

《Complete!》

そんな音声が聞こえると同時に、胸部のアーマーが肩に装着、赤いラインは銀色に変わり、複眼は黄色から赤色に変わった。

『ファイズ・アクセルフォーム』に強化変身した明久は、ファイズアクセルのスイッチを押し始めた。

《Start up》

セイバー

「アデルさん……！１０秒だけそこから離れて下さい……！」

アデル

「？なにかは知らないが分かった……！」

自分の伝えに答えて、アデルさんがそこから退いた。その瞬間

ヒュン……！

明久が消えた。

「……………<明久視点>……………」

うわ凄い、皆止まって見える。僕が速くなったからだ。よし、これならいける……！！

止まっているヴァジュラを、僕はまず顔を蹴り付け、次に胴体をファイズエッジで斬りつける。

そして最後に

《Exceed Charge》

足にファイズポインターを付けて、ファイズフォンの「ENTER」を押し、

ファイズ

「うおおおおおおおおお！！！」

相手に「強化クリムゾンスマッシュ」（クリムゾンスマッシュを一度に複数当てる技）を、喰らわせる。

そして相手に当てた瞬間

《Time Out!Reformation!》

そんな音声が聞こえたと同時に、アクセルフォームから通常形態へ戻り……

時間も動き始めた。

ドゴン！！

ズバン！！

ズドドドドン！！！！

そしてヴァジユラは、さっきの僕の攻撃を喰らいよろめく。

キバ

「ナイス！明久！！」

そこからコータが赤い笛を取り出し、キバットに啜えさせる。

キバツト

「ウェイクアップ！」

キバツトがそう叫ぶと、コータ・・・キバの右足の拘束が外れ、そのまま上空へ飛び上がり

コータ

「おりゃあああああああああ！！！！！！！！！」

ズドン！！！！

キバの必殺技、「ダークネスムーンプレイク」が決まった。

ヴァジュラ

「ぐおおおおおおおおお！……！」（ドガアアアアアアアン……！）

そしてヴァジュラは今の攻撃に耐えきれなくなり爆発した。

キバ

「ふっ、チェックメイトだ。」

セイバー

「待て、それ自分のセリフ。」

こうしてヴァジュラの討伐は終わり、シュラの剣も手に入れた。

第6話「赤い月が染まりし牙」中編その2（後書き）

後編へ続く。

第6話「赤い月が染まりし牙」後編（前書き）

今回は短めです。そして次回予告で重大発表！！

第6話「赤い月が染まりし牙」後編

<トウガ視点>

シユラの剣を手に入れ、アデルさんはそのシユラの剣を抱えて、アデルさんの家があるホルルト村へ帰り、自分達はコータと合流できたので、このままデンライナーへ戻る事にした。

美春

「この汚らしい豚共！いい加減お死になさい！！！」

コータ

「うおおお！あぶねー！！（汗）」

明久

「何で僕までー！！！！？（汗）」

そして帰って来た早々、清水美春はコータを見た瞬間襲いかかって来た（明久はそれに巻き込まれた）。

ちなみにコータは、女子更衣室を覗く度、そこに美波と清水美春がいるのでその二人には嫌われている。

ライ

「おゝおゝ、恐い恐い。」

スバル・瑞希

「「あはは・・・（汗）」」

その光景に、ライ坊はにやにやした表情で他人事のような喋りで見ているだけで、スバルと姫路さんは苦笑いしていた。・・・・と
ころで、

トウガ

「姉さんは？」

そう、自分の姉「サクラ」が乗客室にも写真館にもいなかった。

瑞希

「サクラさんでしたら、別の部屋で何か作っていました。」

何か？セイバーの新しい装備か？

ヤイバ

「まあとにかく、コータとキバのカードが見つかった事だし、次行くか。」

パアアアア！

そう言って兄者は背景ロールを弄り、次の世界の絵が浮かび上がった。

そこには、二人で一人のライダーと、それに似た仮面ライダーが写っていた。

「とある世界」

???

「ワールワール、ついに出来た。『コントンのラブパワー』のエネルギーで作り上げた『ガイアメモリ』を・・・その名も、」

???

「『カオスメモリ』!!!」

|||||次回予告|||||

コータプリニーを育てた元暴君

「ついに暴かれるオメガショッカーの目的!そして、明らかに
真の敵!」

元暴君に仕えし狼男

「まさか奴がショッカーと手を組んだ者とは・・・」

元暴君

「そう、真の敵！それは「プリン体」！！あれほど固く信じ蜜月の時を過ごしたイワシには、大量のプリン体が含まれていたのだった！！」

プリニー少女

「プリン？プリンなら大歓迎だけど。」

元暴君

「バカモノ！そのプリンではない！プリンはプリンでも恐ろしいプリンなのだ！お父さんに聞いてみる！体内で分解され尿酸に変化するプリン体は、高尿酸血症の患者やその予備軍には恐ろしい敵となる物質なのだ！！」

守銭奴天使

「高尿酸血症とは、いわゆる痛風の事ですわ。」

元暴君

「しかし、安心するがよい！プリン体は他の様々な食物にも含まれている！要するに結論としてはだ！！イワシは食べる！！そして他の物を控える！！」

ラスボスを目指す少女

「なるほどー！単純明快なのデス！！」

元暴君

「次回「魔面ライダー」第7話！「ハイパーイワシ」！！戦雲が俺を呼ぶ！！」

魔界大統領の息子

「つまり、なにがなんでもイワシは食べさせたいワケだな・・・？」

？…この予告は嘘予告です。

のあとがきのが本当の次回予告です。

第6話「赤い月が染まりし牙」後編（後書き）

次回、『仮面ライダー始めてみました』は……

スペシャル企画！ついにある作者さんとの長編コラボ！！

オリジナルの敵キャラや、新しいライダーも登場！！

そしてセイバーもパワーアップ！！！！

????「さあ、暗黒に沈め。」

次回、SP第7話『交差するC&S／激突！混沌の仮面ライダー！』

薙ぎ払え！正義の剣で恐怖と悪を！！

SP 第7話「交差するC&S / 激突！混沌の仮面ライダー！」その1（前書き）

今回から暫く、ロムスカ王さんの作品、『仮面ライダークロス』との長編コラボです。

ロムスカ王さん、本当にありがとうございます。

あと、自分の筆記力でキャラが変わってたりしていたらすみません。

時系列は、『仮面ライダークロス』の最終回後です。それではご覧ください。

SP 第7話「交差するC&S／激突！混沌の仮面ライダー！」その1

とある廃工場。そこで亀に似たドーパント、『タートルドーパント』と、ある仮面ライダーが戦っていた。

ドーパント

「うおおおおおおお！！」

亀の如く、足が遅いくせにそのまま仮面ライダーに突っ込むドーパント。

《クロス！マキシマムドライブ！》

そして仮面ライダーは、必殺技『クロスインプレッション』を叩き込む。

ドーパント

「ぐわああああああ！！」

それを直撃を喰らったTドーパントは、十字架のオーラに包まれながら爆発。

そして仮面ライダーは、Tドーパントに向けて言い放った。

謎の仮面ライダー

「眠れ。深淵の底で。」

トウガ視点>

トウガ

「ほ、聖王学園ぐらに大きいな。」

明久

「ここが……、『テメンニグル学園』。」

コータと合流して次の世界、『風都』へやって来た自分達は、仮面ライダー^{ダブル}Wを探す事にした。(メンバー：自分、明久、コータ、姫路さん、スバル)

何故かって？この世界には『フィリップ』さんがいる。あの人からオメガショッカーの事が分かる可能性があるかもしれないからだ。
数時間後。いまだに見つからず、ラーメン屋台『風麵』で休憩していたら……

時季に似合わず、サンタの格好をしたおじさんにフィリップさんがいる、『鳴海探偵事務所』の場所を教えてくれた。……ついでにメンマも。

その後、鳴海探偵事務所でフィリップさんと『左 翔太郎』さんに出会い、これまでの事と、オメガシヨツカーの事を話し、フィリップさんが『地球の本棚』でオメガシヨツカーの事を検索してくれた。

・・・だが、オメガシヨツカーの事については何もなかったらしい。

しかしフィリップさんが、『テメンニグル学園』にいる『ディスク』さんと『白宮光輝』さん、それと『ドナルド』なら何か分かるかもしれないと言い、テメンニグル学園の場所を教えてくれた。

・・・何故にドナルド？

それから暫く、時計を見ると夜になっていたので、テメンニグル学園は翌日行く事にし、デンライナーに戻った。

そして次の日。自分達はドナルドの事だけ疑問に思い、テメンニグル学園へと向かい、今に至る。

トウガ

「さて、あの学園にいるディスクさんと白宮光輝さんを探せばいい

んだな。」

明久

「後ドナルドもね。」

・・・本当にアイツが役に立つのだろうか。

コータ

「じゃ、早く校舎の中に入ろっぜ。」

瑞希

「そうですね。」

ドガアアアアアアアアアアン！！！！

トウガ一同

『！！！？』

コータの言葉に、姫路さん返事した直後に爆発音が響いた。

[illegible]

急いで爆発した所に来ると・・・

???

「はっはっは。」

$$\begin{array}{r} ? \\ ? \\ ? \\ \times 2 \\ \hline \end{array}$$

「
「
・
・
・
・
・
（黒コゲ」

爆発の中心に、黒コゲの生徒が二人とドナルドがいた。早速見つかったけど、何この惨状？

??? x2

「「コラア！ドナルドなにしゃがる！！（怒）」

するとさっきの黒コゲの生徒二人が起き上り、ドナルドに怒鳴る。ていうか回復早いなおい、明久並みに。

ドナルド

「いや、ダンテとベオウルフ懲りずに喧嘩するからつい殺っちゃった」

ダンテ・ベオウルフ

「「やりすぎだろ！？後、字が違う！！」」

ドナルドの説明ツッコむダンテとベオウルフという名前の生徒。

ベオウルフ

「まあいい、ダンテ！今度こそ」

ダンテ

「全く、しつこい奴だ」

気を取り直して、また喧嘩を始める二人

????

「いい加減にシなつて、二人とも！」

を止めに、一人の生徒がやって来た。

ドナルド

「やあ、光輝。ドナルドもさっき止めたんだけどまた始めてしまつてね。」

光輝

「はぁ・・・全く、いつもの事だけどさ。」

ダンテとベオウルフのいつもの事に、思わずため息を吐く生徒。

って、この人が「光輝」。？」

またしても一人の生徒が、『白宮光輝』さんに駆け寄ってくる。

長い金髪、赤い瞳、「そしてバインバインな大きな胸」ってコータ
！人の説明文に勝手に入るな！！

・・・ともかく、光輝さんに駆け寄った人物は、

トウガ

「フェイトさん！？」

自分達の聖王学園の卒業生、フェイト・ハラOWNさんだった。

フェイト

「？」

声掛けられたと思ったのか、フェイトさんがこちらを向く。

トウガ

「フェイトさん、もしかして貴女もオメガガシヨッカー関係でここに？」

光輝さんより、フェイトさんを優先し、すぐさまそう問いかける。
そしてフェイトさんは、

フェイト

「えっと・・・誰かな、君？」

そう答えた。
・・・何故に？

SP 第7話「交差するC&S / 激突! 混沌の仮面ライダー!」その1 (後書き)

その2へ続く。

SP 第7話「交差するC&S / 激突！混沌の仮面ライダー！」その2（前書き）

最近、アメーバピグをやってみたこの頃。

SP 第7話「交差するC&S / 激突! 混沌の仮面ライダー!」 その2

< トウガ視点 >

ビックリした。何にだって? それは

あの後光輝さんとドナルドが、フェイトさんに声を掛けた自分達に
駆け寄ってきて、

ドナルド

「おや？君達もしや、別の世界からきた人かい？」

トウガ

「え？・・・・あ、はい。そうですけど。」

いきなりドナルドからそう声を掛けられ、思わず敬語で返事をする。
てかなぜ分かる？

ドナルド

「なら話は早いや。ここで話すのもなんだし、教室で話そう。」

とりあえず、ドナルドに従って教室に入る。するとそこには

照山

「おう！光輝とドナルド！……って、スバル以外は誰だ？」

イヴ

「ん？」（デロドロンドリンクを飲んでる最中）

セツナ

「あら？誰、あなた達？」

未央

「もしかして転入生？」

クチナシ
梶

『女装が似合いそうな男子一名を発見。』

こっちは知っているのに、あっちは（スバル以外）知らない自分達の学友達と

????

「すみません。ディスクさんいませんか？ちょっと調べてほしい事が」

スバル（トウガ一同の）
「へ？」

スバル×2・トウガ一同・ドナルドと光輝以外のテメンニグル学園
の生徒

「ア、アタシが（ス、スバルが）二人いるーーーーー！
！？」

もう一人のスバルがいた。

これにビックリしたって事です。分かった？

って誰に話してるんだ自分？

|| || || || || || || || || || || || || || || ||

トウガ

「
という訳なんです。」

照山

「なるほど。それで光輝とディスク、そしてドナルドなら何か分
くとフィリップに勧められてココに来たと。」

光輝

「僕達が知らない所でそんな事が起きてるなんて・・・」

あれから数分後。一応落ち着きを取り戻し、教室の皆にこれまでの
事を説明した。

トウガ

「さて。こっちの事情は説明しましたが、ドナルドさん。あなた
の話と言つのは？」

ドナルド

「はっは。君達の敵、オメガショックーについてさ。」

瑞希

「え?!分かるんですか!?!」

ドナルド

「はっはっは。ドナルドは何でも知っているんだ」

いや意味分かりませんよ。

光輝

「まあ、あまり深く考えない方がいいよ。ドナルドはいつもああだから。」

トウガ

「ああ、そうですね・・・」

「……………」

ドナルド

「それじゃあ何から知りたいかい？」

ドナルドがそう自分達に問う。すると先に、明久が拳手をしながら質問する。

明久

「えっと、オメガシヨッカーの目的が何なのかを……………」

ドナルド

「オメガシヨッカーの目的……それは世界を亜空間へ引きずり込み、その世界の知識、技術、兵器、それらの物を全てを取り込み、混沌の神へとなる為。」

スバル（トウガ一同）

「亜空間？」

瑞希

「混沌の神？」

ドナルド

「『この世界』とは異なる世界、それが亜空間。そして全てが入り混じった存在、それが混沌の神。」

トウガ

「なるほど。それじゃあ次、ショッカー残党と手を組んだ黒幕は？」

ドナルド

「タブー。」

トウガ

「タブー？」

ドガ
アアアアン!!!

トウガ一同・テメンニグル学園一同

『！！！！』

突然、遠くから爆音が響き渡る。何事かと窓を方を見ると、大きなロボットが暴れている。

「……というか、アレってだんだんじゃねえか。どうしてここに

いや、大体分かった。ばいきんまんの奴、オメガシヨッカーと手を組んだんだっけ。

トウガ

「とにかく、アイツをぶっ飛ばしに行くか。明久、コータ。」

明久

「うん。」

コータ

「OK。」

すぐさまだんだんを止めに行こうとした瞬間

ドオオオン！！！！

ズドオオオオン！！！！

ドゴオオオオン！！！！

ドカアアアアン！！！！

別の場所からも爆音が響き始めた。おいおいおい、いくらなんでも多すぎねえ？

トウガ

「参ったなあ。一つずつ当たっていく訳にも行かないし、かといって今の戦力を分担する訳にも・・・」

そんな自分がどうするか迷っているその横で、

照山

「光輝！俺とイヴで南の方へ行く！！」

セツナ

「私達は東の方へ行くわ！！未央、梶！！」

未央

「んい！！」

梶

『合点承知！！』

光輝

「分かった！それじゃあ僕とフェイトは「いやいやちょっと待って！！」？」

既に全員戦闘態勢に入っていた。おいおい、全員生身で戦う気か！？

照山

「モチロンだ！というかいつもああいうのと戦っていたからな！！」

あり得ねー！！！！こつち（トウガ一同）の照山じゃ、西村先生どころか不良10人前後でも敵わないのにー！！！！

明久

「ていうか、皆さん戦ってくれるんですか？」

イヴ

「当たり前だ！お前らの事情はともかく、僕達の世界が危ないなら戦うべきだろ！！」

光輝

「イヴの前半の発言は置いといて、世界が危機に晒されているなら

それを救う。それが仮面ライダーだからね。」

トウガ

「……………つぶ、全くですね。」

光輝

「それじゃあ君達はさっきのロボットの方に。僕とフェイトは西の方に行くよ。」

トウガ

「？北の方は？」

光輝

「そっちは翔太郎さん達が行ってくれるよ。フェイト。」《クロス！》

フェイト

「うん。」《フェイト！》

……………え？光輝さんはともかく、もしかしてフェイトさんも？

光輝・フェイト

「「変身!」!」

《クロス!》

《フェイト!》

光輝さんは『クロスメモリ』を、フェイトさんは『フェイトメモリ』を起動させてベルトに差し込む。

そして二人はそれぞれ、『仮面ライダークロス』と『仮面ライダーフェイト』に変身した。

トウガ

「さて、こっちもさっさと行くか。」

明久

「オッケー。」

コータ

「待ってました!」

改めてだんだんを止めに行くと、

なのは

「フェイトちゃん！光輝くん！」

はやて

「戦いやろ？私らもいくで！」

トウガ

「あ、はやてさん。そして魔王^{なのは}さん。」

教室にテメンニグル学園側のはやてさんとなのはさんがやってk

ゴキヤ！

なのは

「君、今いきなり何か失礼な事言わなかった？」

トウガ

「何でもございません。（汗）」

魔王と書いてなのはと言った瞬間、自分の右手首が逆方向に曲がった。くそ、さすが魔王！破壊力が半端ね

ゴキヤ！

なのは

「君、今何か失礼な事考えなかつた？」

トウガ

「何でもございません。（汗）」

そしてついには左手首も逆方向に曲がった。考えるのも駄目なのかよ！！！！

手首を元の方に戻し、痛みを堪えながら今度こそだんだんの所

へと向かった。

SP 第7話「交差するC&S / 激突! 混沌の仮面ライダー!」その2 (後書き)

その3へ続く。

SP 第7話「交差するC&S / 激突！混沌の仮面ライダー！」その3（前書き）

お知らせ：店の都合で店は土日祝日の営業となり、平日は他の仕事をやる為もしかしたら小説がまた暫く書けなくなりそうです。

コラボ長編の最中なのに……ちくしょう。

SP 第7話「交差するC&S / 激突！混沌の仮面ライダー！」その3

<トウガ視点>

ばいきんまん

『だっはっはっは！この町をメチャクチャにしてやるのだっ！！』

かびるんるん達

『かびかびっ！』

シヨツカー隊員達

『イー！！』

明久とコータと一緒に現場へ到着して見ると、ばいきんまんだけじゃなく、かびるんるんやシヨツカー隊員も町で暴れていた。

明久

「おい！やめろー！！」

明久がばいきんまんに向けてそう叫ぶ。

ばいきんまん

『んあ？何だ……っってお前ら！？この間の……！』

明久の声に反応して、だだんだんに乗っているばいきんまんがこちらに気づいて驚く。しかも自分達の事覚えていたとは。……明久並みのバカのくせに。

明久・ばいきんまん

『「今何か失礼な事考えなかった（か）！？」』

やれやれ、何で『バカ』で反応するんだこの二人。

トウガ

「とりあえず、ばいきんまん。どうしてお前がこんな所にいるんだ？」

ばいきんまん

『お前らを倒せとオメガシヨッカーに言われてな！ここで暴れればお前らが自然と出てくると思ってな……！』

即答で自分達に答えてくれた。やっぱりバカだコイツ。

トウガ

「さて、明久はかびるんるん。コータはショッカーの相手のしてくれ。」《セイバー！》

コータ

「おう。」ガブツ！

明久

「いいけど、何で僕をびるんるんに？」《5・5・5！Stand
ing-by！》

トウガ

「目には目を、歯には歯を、ザコにはザコだ。」《セイバー！》

明久

「酷い！！（泣）」《Complete！》

コータ

「待て、それじゃ俺もザコって事か？」

セイバー

「明久より強いザコだからいいじゃねえか。」

キバ

「……………それもそうだな。」

ファイズ

「うわあああああああん！（大泣）」

フェイト

「ライダースラッシュー!!」

クロス

「デステイニーグレイブー!!」

ズバァァァァァァァァァァン!!!

ショッカー隊員達

「イー!?」

かびるんるん達

「かびかびー!?」

ドガァァァァァァァァン!!!

仮面ライダーフェイトと、仮面ライダークロスは必殺技で敵を一掃していく。

どっかの無双ゲームのように。

|| || || || || || || || || || || || || || || ||

同時刻、東の方では・・・

セツナ

「デーンドライブフォックスハウンド!」ドドドドドドドドドドドドドドドド!

ショットカー隊員達

『イー!?!』

かびるんるん

『かびかび〜!?!』

まずはセツナが音速を超える連撃で敵をかく乱し

梶

『メイデンリストラクション。』

シヨッカー隊員達

『イ！？』

かびるんるん

『かび！？』

梶が出す香で敵の動きを止め

未央

「みおちゃん……ぱんち!!」どか~~~~~ん!!!!

シヨッカー隊員達

『イーーーー!!!!』

かびるんるん

『かび~~~~!!!!』

未央の一撃で敵を吹っ飛ばした。凄いコンビネーションだ。

セツナ

「さて。ここはもう大丈夫だし、他の所の援護に行くわよ。」

未央

「んい！」

梶

『了解。』

ザコを倒し、セツナ達はさっき言った通り他の所への援護に向かう。

???

「そうはいかないよ。」

セツナ

「!？」

未央

「？」

梶

『真打ち登場!？』

その後、セツナ達の前に立ちふさがる者が現れた。

[illegible]

同時刻、南の方では

昭山

「リトルボーイ！」

イヴ

「イブキャノン！」

ドガァァァァァァン！！

こちらにも順調に敵を倒していた。・・・だが、

シヨツカ―隊員達

イ！イ！イ！イ！

かびるんるん達

『かびかびかび~~~~!!』

照山

「くそ！ザコだから倒しやすいが・・・」

イヴ

「・・・・・・数が多すぎる。」

あまりの敵の多さに苦戦しかけていた。

ショッカー隊員達

『イー！』

かびるんるん達

『かびー！』

敵がイヴ達に再び襲いかかる。

照山

「でえい！しつけえ！」「ドゴン！」

イヴ

「イーイーやらかびかびやらつつせえんだよ！」「ズドン！」

シヨッカー隊員達

『イー！』

かびるんるん達

『かびかび〜！』

どす〜〜〜ん！！

照山・イヴ

「「のわあ！？」」

その敵を殴り飛ばす二人。しかし、数の多さで押し負けてしまい敵

に押しつぶされてしまった。

照山

「ぐううううううう！！」

イヴ

「くっそおおおお！！」

???

「でりゃあああああああ！！！」

ずどがああああああああん！！！！

シヨツカー隊員達

『イー！？』

かびるんるん達

『かびー！？』

もう少しで潰される所で、誰かが敵をふっ飛ばし二人を助けた。

照山

「ふう、もう少しでアニメのような紙みたいにペラペラになるとこだったぜ。」

イヴ

「誰だか知らないけどサンキュー。」

???

「・・・・・・はあ？」

助けた人物は、「何言っただこいつ等？」という顔をしていた。

||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||

セイバー

「ふゝ、ざっとこんなもんか。」

あれから数分後

ばいきんまん

「はひゅ……」

シヨツカー隊員達・かびるん達

「……」

自分達はばいきんまん達を一掃した。

セイバー

「さて、ここは片付いたし他の所の援護に行くか。」

？
？
？

「キ
バ
おう。」

「ファイ
ズ
オッ
ケー。」

「悪いけど、君達はこちらまでだ。」

セイバー一同

『！！！？』

突然の声と一緒に今までに感じた事のない殺気を感じとり、その方向に視線を向ける。

？？？

「やあ、こんにちは。」

そこには、さわやかな笑顔をした少年（身長からして小6から中1くらいの）がこっちに挨拶していた。

セイバー一同
「……………」

しかし、こっちはその少年を警戒している。何故なら少年からあの殺気が伝わっているからだ。

セイバー
「……………誰だ？」

とりあえず自分が少年にそう問いかける。

オウガ
「僕かい？僕はオウガ。君達を倒す為に作られた者さ。」《カオス！オーガ！》

そう言いながらオウガと名乗った少年は、ポケットから二つのメモリを起動させる。

それを上に投げ飛ばし、その間にダブルドライバーに似たベルトを着ける。

オウガ

「変身。」《カオス！オーガ！》

そして落ちてきたメモリは正確にベルトのスロットに入り、黒い風がオウガを包み込む。

その黒い風が収まった頃には、オウガの姿が変わっていた。

カオス（オーガフォーム）

「仮面ライダーカオス。これより、『オペレーション：ソードブレイク』を開始します。」

禍々しい仮面ライダー、『カオス』へと。

SP 第7話「交差するC&S / 激突! 混沌の仮面ライダー!」その3 (後書き)

その4へと続く。

SP 第7話「交差するC&S / 激突！混沌の仮面ライダー！」その4

<光輝視点>

クロス

「!？」

フェイト

「どうしたの、光輝？」

クロス

「今、とてつもない殺気が……」

それを感じた瞬間、僕は心配になった。僕一人なら、今の殺気を放った奴を倒せれる。けど他の皆じゃ歯が立たない。

クロス

「フェイト直ぐに皆の所に行こう。嫌な予感がするんだ。」

フェイト

「分かった。」

???

「んっふっふ。そうはいかないよう。」パチン！

クロス・フェイト

「「！？」」

声と指鳴りが聞こえた瞬間、僕とフェイトは変わった空間に閉じ込められた。

<トウガ視点>

カオス

「仮面ライダーカオス。これより、『オペレーション：ソードブレイク』を開始します。」

カオスがそう言った瞬間、凄いスピードでこっちに向かってきた。

セイバー

「来るぞ！」

ファイズ

「分かってる！」

キバ

「おう！」

自分の警告に返事をして構える二人。

カオス

「ふん！！！」

そしてカオスは、突っ込んだまま自分に殴りかかる。

ズドン！

セイバー

「ぐうお!？」

それを両手で受け止めるが、威力まで受け止めきれず吹っ飛ばされる。

ファイズ

「トウガ!！」

キバ

「やろう!！」

今度はコータがカオスに向かって突っ込む。

カオス

「ハッ!！」ドゴン!

キバ

「ごおあ!？」

しかし、カオスはそれをハイキックでコータの顔を蹴り上げる。

《Exceed Charge!》

ファイズ

「はあああああああああ!!!」

その隙に明久がカオスに向けて『クリムゾンスマッシュ』を放つ。

《オーガ!マキシマムドライブ!》

対するカオスもメモリを横のスロットに差し込み、左手から黒く禍々しいエネルギー体を作り出し

「オーガインパクト!!!」

ファイズ

「うわあああ
あああああ
あああああ
あああああ
！！！」

432

二人が戦っていた間、自分は空高く跳んで奴に向けて必殺技を放つ。

セイバー

「バスタードドロップ！！！」

《カオス！マキシマムドライブ！》

奴は今度は別のメモリを差し込み、右手から禍々しいオーラが出る。

カオス

「カオスストライク！！！！」

そのオーラを一直線に自分に向けて放った。

ズガアアアアアン！！！！

そして技と技のぶつかり合い、押し勝ったのは

セイバー

「ぐはあ！！」

カオスの技だった。

[illegible]

セイバー

「ぜえ．．．ぜえ．．．」

ファイズ

「はあ．．．はあ．．．」

キバ

「ふー．．．ふー．．．」

カオス

「．．．．．」

数分後。あれから何度も攻撃したが相手及ばず、一撃も当てられず自分達は地面に突っ伏していた。

キバ

「くそー！強すぎる！！」

ファイズ

「今まで相手してきた奴らより桁が違っよ．．．．．」

セイバー

「雄二アギト並みか……それ以上か……」

カオス

「さて、そろそろトドメ……?」

自分達にトドメを刺そうとカオスがこっちに向かってきたが、途中で足を止める。何だ？

カオス

「……カオス、撤退します。作戦続行の為、最強魔獣『マッシャー』と交代します。」

そう言つてカオスは銀色のカーテンのようなものの中に入り消え去った。

代わりに鉄球を持った大きなロボットのような魔獣が現れる。

おいおい、アイツが去つたのはいいが今度はこいつを相手しろつて？無茶苦茶な……

???

「なら、俺が相手してやる。」

セイバー

「!？」

また敵か?!そう思って声のした方に視線をやると

聖王学園の生徒の一人、アダム・ブレイドがいた。

ブレイド

「よう、助太刀に来たぜ。」

そう言ってブレイドは、銀と黒のオーズドライバーのような物を装着し、

ブレイド

「ふん！」ブォン！！

身体の中から3枚のメダルを取り出してスロットに入れる。

ブレイド

「変！身！」

そしオースキャナーのような物でメダルをスキャンし、変身する。

ヤイバ

「ホントかサクラ！」

サクラ

「はい！」

ヤイバ

「よし！後は俺に任せる！これをアイツのトコまで持っていく！」

サクラ

「お願いします、兄さん！」

何かが完成し、それをヤイバが大急ぎで持っていった。

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

ZERO

「ずうあああああああ……」「ドゴゴ……」

ZEROがマッシャーを思いっきり殴る。

ZERO

「つおおおお〜。(汗)」

無茶苦茶硬かったらしく、殴った拳を振り回す。

マッシャー

「……………」

痛がっているZEROを気にせず、マッシャーは持っていた鉄球を振り回し、ZEROに向かって降り飛ばす。

ZERO

「ぬおおおおおお!!?」

それを何とか避け切るZERO。しかし、ここで問題が……………

セイバー

「……………嘘。
（汗）」

何とその鉄球がこっちに来た。

セイバー

「やべ！……………つつ！？」ドサ！

立ちあがって避けようとしたけど、まだダメージと疲労が残っていたせいか、足がすくんでしまった。

まずい！直撃する！……………そう思った瞬間、

ヤイバ

「トウガー……！！！」

兄者がこっちにトランクを持って走っていた。

ヤイバ

「これを使え……！！！」

そう言つて、兄者がトランクを自分に向けて思いっきり投げた。

セイバー

「っ！！」パシッ！

それを何とかキャッチし、トランクを開け

ファイズ

「トウガ、危ない……！！！」

セイバー

明久の声が聞こえた瞬間、自分の目の前に鉄球が

<光輝視点>

シュン！

クロス

「?!」

フェイト

「ここは？」

さっきの空間から約数秒。閉じ込められたと思ったら、さっき同じ場所ではないけど元の世界に戻っていた。

セツナ

「あら？ここは……」

未央

「戻ってこれた？」

梶

『でもさっきと同じ場所じゃない。』

すると僕らの横には、いつの間にかセツナさん達もい

っ!?

フェイト

「?どうしたの光輝

」

フェイトも声が止まった。見てしまったから。

鉄球に潰されている人の姿を．．．．．

[illegible]

< 明久視点 >

フェイス

「トウガ……」

そんな……間に合わなかった……もうあれじゃあトウガは……

《ドラゴン！セイバー！》

ファイズ

「！？」

鉄球の下からそんな音声が聞こえた。もしかして

ゴシヤアアアアアアアン！！！！

突然鉄球が粉々に砕けて、その下から姿を現した。

紺色と血のような赤の2色

硬く、鋭い爪

そして大きく、自身をも包み込めれるような翼

セイバー

「ガああアああア亜ああ鳴ああアアああアアア亜ああ鳴鳴アアアアア
ア!!!!!!!!!!」

トウガは新しい姿のまま、怒り狂ったかのように雄叫びを上げた。

SP 第7話「交差するC&S / 激突! 混沌の仮面ライダー!」 その4 (後書き)

その5へ続く。

SP 第7話「交差するC&S / 激突! 混沌の仮面ライダー!」その5 (前書き)

やっと更新できた。

・・・でも来週引っ越してまた暫くは更新できなさそうです。(泣)

SP 第7話「交差するC&S / 激突！混沌の仮面ライダー！」その5

両足と右腕には竜の鱗で出来たような鎧、左腕にはスロットが搭載した黒い籠手。

背中には大きな翼、腰には1 mあるか無いかの尻尾。

そして顔は、竜の牙を現したような角と、鱗を覆ったような顔。

セイバー

「ウオオオオオオオオオオオオ!!」(ドン!ドン!ドン!)

そしてセイバーは相手の懷に飛び込み、そのまま3発拳を打ち込む。

セイバー

「ヌウア!!」(ズガン!!)

さらに回し蹴りで追撃、マッシャーを吹き飛ばす。

セイバー

「亜ア鳴ああアあ鳴あ亜鳴ああ!!」

そしてまた吹き飛ばしたマッシャーに突っ込んで行くセイバー。

獲物を追い詰めるその姿は、正に獣。

|| || || || || || || || || || || || || || || ||

< 明久視点 >

ファイズ

「す、凄い・・・」

新しい力を手に入れたトウガの怒涛の勢いに、僕は茫然と立ち尽くしながらそう言った。

キバ

「すっげー。あれならトウガもアレを倒せそうだな。」

隣でコータがそう呟く。それについては僕も同意見だ。確かにあれなら

ヤイバ

「おいトウガ！目え覚ませ！！」

行けるかもって思った瞬間、ヤイバさんが声を上げる。ていうか、目を覚ませって？

ヤイバ

「トウガが今使ってる『ドラゴンメモリ』、アレは自身の身体能力を臨界まで上げる代わりに闘争本能を爆発的に上昇させるんだ！だから今のトウガは敵とみなした相手に襲いかかる化け物と同じって事だ！！」

キバ・ファイズ

「「ええ！？」」

マジで！？……あ！そう言えばトウガ叫んでばっかだ！アレじゃあ壊れててもおかしくない！！

ファイズ

「コータ！」

キバ

「おう！力づくでも止めるぞー！」

ヤイバ

「よし、ブレイド！お前も」

ブレイド

「めんどくせー。」

ファイズ・キバ

「「おおい！？」」

いつの間にか変身を解いて、テレビを見ながら（どっから持ってきた？）くつろいでいた。

ヤイバ

「やってくれたら妹系のエロ本やるよ。」

ブレイド

「トウガ待つてろ！すぐに目を覚まさせてやる！！」

「……相変わらず女の子（10才前後の年下限定）が好きな人だ。」

ブレイド

「だが今のメダルじゃ勝てるかどうか……よし、未央たん！
！」（ビュン！）

ブレイドさんが何か呟いた後、一枚のメダルを未央ちゃんに目掛けて投げる。

チャリン！

未央

「んい？」

そして未央ちゃんのおでこにコイン投入口が現れ、メダルはそこに
見事に入った。

つてもしかしてヤミーまで作れるようになったの！？

ブォン！！

と思っていると、未央ちゃんからさっき投げたメダルと知らないメ
ダルが出てきた。あれ？ヤミーじゃない？

ブレイド

「靴下！しましま！！」（ビュビュン！）

今度はセツナさんと梶さんにもメダルを入れ、また知らないメダル
が出てきて全部ブレイドの手に収まった。

ブレイド

「それじゃあ早速使わせて貰うか！」

そう言ってブレイドさんがさっきのメダルをベルトに入れ、オースキャナーに似た物でスキャン。

ブレイド

「変！身！」

《フレグランス！パワー！スピード！》

さっきのとは違う、『仮面ライダーZERO』に変身した。

ZERO

「おい！その仮面ライダー！」

そう言ってブレイドさんが指差した仮面ライダーは……

クロス

「え、あ、僕？」

さっきまでのやりとりにビックリしたのか、茫然と立ち尽くしていた光輝さんことクロスさんだった。

ZERO

「おう！お前も行くぞー！！」

クロス

「あ、はい！」

フェイト

「光輝！頑張つて！！」

クロス

「うん！」

ヤイバ

「……異端者発見。（怒）」

なんかヤイバさんから見覚えのある黒いオーラが見えるが今は無視。
トウガの暴走を止めるのが先だ！

[illegible]

セイバーは自分の敵とみなした者に襲いかかり、（つまりマッシュとファイズ達全員敵）

そしてファイズ達はマツシャーの攻撃に耐えながら、セイバーの暴走を止めに掛かる。

セイバー

そんな状況も気にせず、．．．．否、状況も分からない程の理性を失いながら、セイバーは再びファイズ達に襲いかかる。

ZERO

「でやあああああああああ！！」（ガシイ！）

ZEROがパワーメダルで何とかセイバーを捕まえる。

ZERO

「トウガ！目を覚ませ！！」

セイバー

「グウウウウウウウウウウ！！」

ZEROの呼びかけにも反応せず、腕を解こうと暴れるセイバー。

マッシャー

「．．．．．」（ブォン！）

その間に、マッシャーが鉄球を投げ飛ばす。

キバ・ファイズ・クロス

「「うおおおおお！！！」」（ガイン！！）

そしてそれをファイズ達が蹴り飛ばす。

キバ

「でえーい！これじゃキリがないぞ！！」

クロス

「トウガ君！目を覚まして！」

ヤイバ

「そつだぞ！さつさと起きろ！！」

セイバー

「ガアアアアああ鳴アアああ鳴亜！！！」

クロスとヤイバも呼び掛けるが、聞く耳持たず。そして

セイバー

「画アあ!!」(ガスッ!)

ZERO

「ごあ!?!」

ついにZEROの顔面に肘打ちを当て、その隙に腕が解き、セイバーはZEROを振り払いマッシャーに突っ込んで行く。

マッシャー

「.....」

そして対するマッシャーは、セイバーに向けて鉄球を投げ飛ばす体勢に入っていた。

このままでは直撃する。皆がそう思った瞬間、一斉にセイバーに呼び掛ける。

フェイト

「梶原!目を覚まして!!」

未央

「かじはらくーん!!!!」

梶

『起きろー!!!!』

セツナ

「いや梶、アンタのは声じゃないから……」

セイバー

「オオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!」

しかし、皆の声はセイバーには届かず

マッシュ

「……………」（ブォン!）

そしてマツシャーは鉄球をセイバーに向けて投げ飛ばし、そのままセイバーに

ファイズ「さっさと起きろバカトウガアアア
アアアア!!!!!!」

ズ
ド
ン
！

ファイズの叫びも虚しく、鉄球はセイバーに直撃

セイバー

「……………ワるイ。ちょっとネてイタ。」

直撃せず、セイバーの右手で受け止められていた。

ファイズ

「……………遅すぎだよ。バカ。」

セイバー

「ッへ、オマエニバかよバわりされたクねエナ。」

仮面ライダーセイバー、ファイズの叫びで意識を取り戻した。

SP 第7話「交差するC&S / 激突! 混沌の仮面ライダー!」その5 (後書き)

その6へつづく。

SP 第7話「交差するC&S／激突！混沌の仮面ライダー！」その6（前書き）

皆様お待たせしました！バスニグ劇場再び復活！！

セイバー達の反撃戦、どうぞご覧ください！！

SP 第7話「交差するC&S / 激突！混沌の仮面ライダー！」その6

《トウガ視点》

セイバー

「ジョウ況は？（ブンッ！）」

受け止めた鉄球を明後日の方向に投げ飛ばし、明久達に状況を探ねる。

ファイズ

「見ての通り、あつちはまだピンピンでこっちはボロボロだよ。というか、そのおかしな喋り方直らない？」

セイバー

「む理だナ。意識を保ツだけデー杯イツ杯だ。ちよっト隙ヲ見せタラまた暴れダす。」

それにこつちだってこの喋り方には違和感があるんだよ。

セイバー

「とリアえず、寝ボケてたブンはシツかり働く。皆八休んでクレ。」

キバ

「りょーかい。後任せたー。」

そう言つて一足先にコータが一目散に逃げ出した。あいつホント失礼だ。

ZERO

「俺はまだやるぜ。」

逆にブレイド先輩はまだやる気満々で、自分の横に並ぶ。まだ殴り足りないようだ。

ZERO

「殴られて逃げるのは好きじゃねえ。それに試してえ物もあるしな。」

そう言つてブレイド先輩は、さっきのメダル（ホノオ）とほぼ同じ色のメダルを二枚取り出す。

クロス

「僕も行くよ。君をまた暴走させない為にも。」

光輝さんも自分の横に並ぶ。ありがとうございます。

ZERO

「さて、さっさと終わらせるぞ！」

ブレイド先輩がさっき取りだした別のメダルをベルトに入れ、

ZERO

「変身！」

《ダイヨン！アゲニツシュ！ホノオ！ダゝイアゝグホゝゝ！！》

仮面ライダーオーズのような一色コンボに変身した。

マッシャー

「・・・・・・・・（ブォン！）」

その直後、マッシャーが鉄球をこちらに投げてきたが、

ZERO

「よー！」

クロス

「ふー！」

セイバー

「ホ！」

それを難無く自分達はそれを避け切り、マッシャーに突っ込む。さあ、反撃開始だ！！

その頃、テメンニグル学園：生徒会室

左天

「いいんですか？我々はお出なくて。」

アークライト

「白宮光輝と別世界の仮面ライダーがいるんだ。大丈夫だろう。」

右天

「それにしても、さっきの男なんだっただんどうね？」

離留

「私達に変なメダルを入れて、それと一緒に出てきたメダルを取ったらすぐさまどこかへ行ってしまうわね。」

アルカ

「何が目的だったんでしょうか？」

アークライト

「さあな。だが、奴を見たら無性に殴りたい気持だったかな。」

そう言つてアークライトは、子どもも泣くような恐ろしい笑みを浮かべていた。

離瑠

「今のアーケライト様、とても優しい顔してる。／／／／」

左天

「え?!」

右天

「ど、どこが!？」

アルカ

「……………(汗)」

約一名、それにうつとりする者がいた…………。

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

場所は戻り、セイバー達は…………

ZERO

「でえりゃあー!! (ドン!)」

クロス

「はああ!! (ズバン!)」

セイバー

「オリゃああアー!! (ズドン!)」

見事な連携でマッシャーを押していた。

セイバー

「マだまだ行クぞ!!」

そう言いながらセイバーはドラゴンメモリの角を一回叩く。

《ドラゴンフレイム!》

するとセイバーの右手に炎の塊が集まり、

セイバー

「でやあアー!! (ゴウン!)」

それをマッシャーに向けて放つ。

マッシャー

「..... (ドゴン!)」

マッシャーは、それを両腕で難無く防ぐ。.....が、

ZERO

「ヴァルカンショックイグニッション!!! (ドウン!!!)」

マッシャー

「……………！（ボガン！）」

ZEROの追撃により、両腕を弾かれ、

クロス

「やあああああ！！（ズバン！！）」

クロスの斬撃で直撃を受ける。

マッシャー

「……………。（ヨロヨロ）」

さすがのマッシャーもいくつもの連撃を喰らったせいか、よろつき始めていた。

ZERO

「トウガ！クロス！」

クロス

「はい！」

セイバー

「分かってル!!」

それを好機と見て、それぞれ必殺技を発動させる。

ZERO

「さあ泣き叫べ! 判決の時間だ!!」

《スキヤニングチャージ!!》

ZEROはオースキャナーのような物でメダルを再びスキャン。

クロス

「フィニッシュ。」

《クロス! マキシマムドライブ!!》

クロスはドライバーの中心に付いている銀端子に親指で触れる。

セイバー

「チェックめイトダ。」

《ドラゴン！マキシマムドライブ！！》

セイバーはドラゴンメモリの角を三回叩く。

セイバー・ZERO・クロス

「「「はああ！！（ドン！）」「」「」

そして三人共、空高く跳び上がり、それぞれの必殺技をマッシャーに放つ。

ZERO

「特攻！バーニング！！スマッシュアアアアアアアア！！！」

クロス

「クロスインプレッション！！！」

セイバー

「ドラゴオオオオン！！ブレイカアアアアアアアア！！！」

ズドドオオオオオオオオオオオオオン!!!!!!!!

そしてマツシャーは、三つの必殺技に耐えきれず爆散し、三人共マツシャーの亡骸にこう言った。

クロス

「眠れ。深淵のそこで。」

ZERO

「判決！！死刑！！！」

セイバー

「ちエツくm・・・ア、これハもう言ったカ。」

最後の最後で締まらない締めであったが、仮面ライダーチームの勝利で収めた。

SP 第7話「交差するC&S / 激突! 混沌の仮面ライダー!」その6 (後書き)

その7へ続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1919p/>

仮面ライダー始めてみました。

2011年11月27日15時52分発行